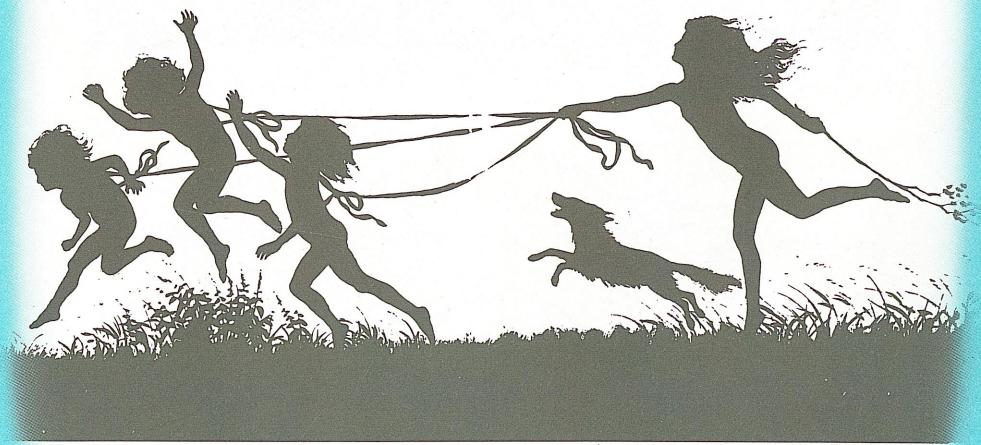


家庭・保育所・幼稚園

N24  
1  
841

# 幼児の教育

11



第八十四卷 第一號 日本幼稚園協会

イラスト保育実技シリーズ①

# 幼児の発表会 その準備と進め方

館 紅・著



子どもの小さな遊びから、劇遊びへと展開させるコツがよく分かる。

本書は、子どもと「発表会」に取り組む先生のために、発表会の基本的な考え方、出演種目の決め方、脚本の選び方、スケジュールの立て方、保育者同士の協力のしかたを詳説しています。  
☆著者脚色の脚本を9編紹介。

A5判・216頁・定価1,500円

# 保育イラストブック

絵／江川厚子・奥谷ます子・冬野いちこ・ふじたひでみ フレーベル館 編



園だよりのアシスタント！  
楽しいイラストがどのページにも！

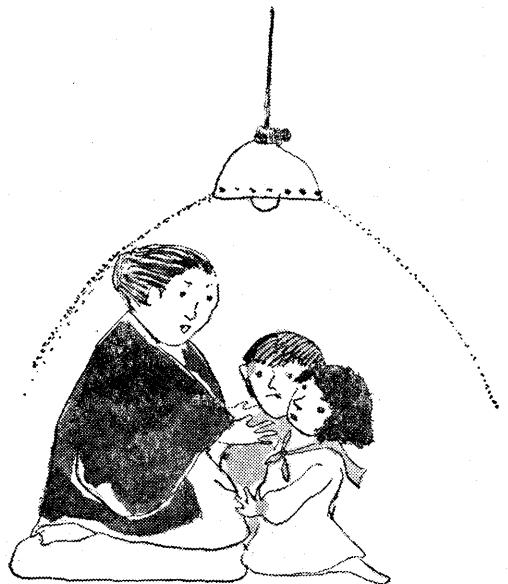
- ルーズリーフ式で原稿作りがスピーディにできます。
- やさしい線画で、色ぬりもできます。
- オリジナルイラストのヒントにもなります。

A5判・104頁・ルーズリーフ式・定価1,600円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える  
キンダーブックの  
**フレーベル館**

# 幼児の教育



第八十四卷 第一號

# 幼児の教育 目 次

— 第八十四卷 一月号 —

© 1985  
日本幼稚園協会

「育てる」仕事の再認識を

——昭和六十年代を迎えて——

津 守 真 … (4)

S.F.的読み解き

子どもという風景(1)……………堀 内 守… (7)

宗教人類学からみた子ども③

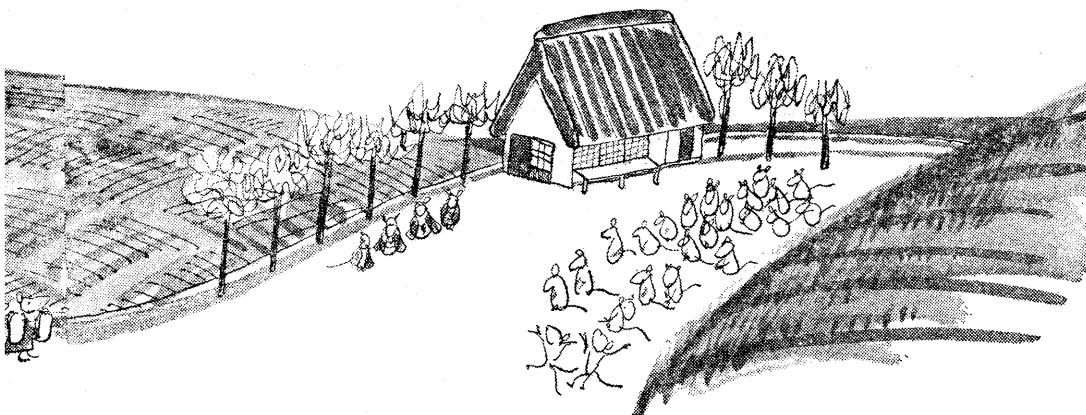
——洞窟の話——……………関 一 敏 … (16)

いろいろなことを教えてくれる子どもたち(7)

村 石 京 子 … (25)

兎園隨筆⑤

——お伽の国へ——……… 蕪 木 寿 江 … (30)



養護学校の日々

子どもが遊びを妨げられとき…………津守 真：(32)

保育実習ノートから②……………(40)

光る夢……………芥川美千代：(44)

子どもと椅子の関わりをめぐって…………佐治由美子：(47)

近代短歌に現われた子ども(一)(一)(一)…………大塚 雅彦：(56)

表紙絵・『ヨーロッパのきりがみと影絵』(岩崎美術社刊)より  
カット・福田 理恵



## 「育てる」仕事の再認識を

—昭和六十年代を迎えて—

津 守 真

ある日のことである。数人の小さい子どもが滑り台で遊びはじめたとき、私は滑りおりてきた子どもを、下で受けとめていた。中には、はじめてひとりで滑った子どももいる。滑りおりたところで、一瞬とまり、やつたというような表情で、私を見て笑う。私もその一瞬を受けて、しばらく息をのむ。そうして、腰を床につけていた子どもは、自分で立ち上り、ひとりで階段を上ってゆく。次の子どもは、声を立てて滑りおりたところで、顔を見合わせて笑う。かなり長い時間に感じられる、子どもと相向うその時は、活動の他の部分から切り離され、その時だけで価値をもつ、落着いた一瞬間であるように思われる。私も、滑り台を継続させようと動くのではなく、滑り下りたその現在を、子どもと一緒に実

感するだけである。そうすると、子どもはまた、自分から階段に向う。

子どもと共有された落着いた静けさは、子どもの中に、小さな、しかし決然とした自発性を生み出し、大人の中に、子どもと共に現在を生きることのできた相互性の感覚をよび起す。子どもにとって、このとき、滑り台をして遊んだというよりも、他人との相互性の中で自分が生きた体験が、この一日の原動力であったと思う。

幼児が遊ぶことのできる幼稚園をということは、フレーベル以来の幼児教育の主張であり、今世紀初頭の新教育運動の教育改革の原点であり、また、昭和初期より、戦中戦後を通して我が国の幼児教育の先覚者、先輩たちが実現しようと努力してきたことであつた。急激に人間生活が変化しつつある現代において、子どもが遊ぶことのできる生活をつくることは、とくに意識してなさねばならない。緊張の課題となつた。幼稚園だけの問題ではなく、子どもの生活全体において、子どもらしい遊びが奪われている。ごく小さいときから、親がついていかなければ遊ぶ場所が得られない住宅環境、幼稚園から帰つた後まで、計画的活動の過密な子どもの生活、こうした環境の中での幼稚園の中の子どもの遊びは、特別に重要な意味をもつて至つた。

カリキュラムに遊びの名前が列挙されても、整列して並び、遊びはじめたと思うと集められる生活の中で、子どもは本気で遊ぶとは思えない。子どもの生活にゆとりがなければ、うむ、トモム加添い田井といひて、ヒト等こらわいづばくへつりこなう、子

どもは本当に遊ぶようにならない。遊びの中で育てられるのは、物、他人、世界、人生に対する根本態度である。子どもと大人との間に、落着いた相互性の瞬間がもてるとき、そこから、子どもは自信をもって未知の世界に一步を踏み出す。そのとき、大人の期待の中にはない、他者としての子どもの世界が開かれてゆく。それと出会つて、共同の生活をつくりゆくのが保育である。

新しい年、昭和六十年代を迎える。昭和二十年代、三十年代、四十年代、五十年代と変化してきた幼児教育界を顧りみると、いま、社会のもつ「人間を育てる」機能を自覚する時であると思う。富国強兵の絶対的要請が、敗戦によって破れた昭和二十年代は、渾沌の社会であったが、幼児教育によつて日本の礎を築くという氣概があつた。次いで高度成長の経済優位、科学技術万能の時代を経過した私共は、教育はそのいづれにも従属するのではないことを、その中を生きることによつて知り得た。どんな子どもも、希望をもち、生き甲斐をもつて一日を過せるようにすること、それが一人の人間の生涯を育てていることである。「育てる」ことは、人目にふれないところで行われる毎日の地味な仕事である。この最も人間的な行為である「育てる」ことの価値を再認識しつつ、実践と研究を進めてゆきたい。

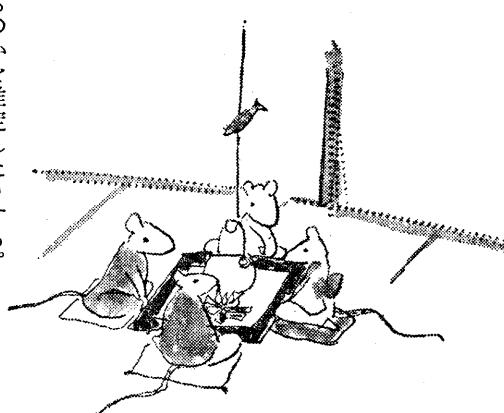
(愛育養護学校)

# SF的読み解き

## 子どもという風景

### 第一回 テレくさき初心の構造

堀 内 守



1

#### 見ること・見られること

一枚の写真があつたとする。

真がいつ頃のものかを推定したりする。

そこには直接写っていないが、写されているものを介して、間接的に見えることのできるものもある。たとえば、その写真を撮影した時のカメラの位置。それは直接には写っていないが、少し気をつけるとわかることがある。もう少し慣れた人なら、その写真を撮影した人の

読みとができるだろう。まずはそこに写っている  
“腕”の水準まで推定することができよう。

ものや人。ついで、写真のフィルムに目を移し、この写

鏡などの場合はどうだらうか。

私たちは身のまわりに多くの鏡をもつてゐる。手鏡、洗面所の鏡、自動車のバックミラー。通りに面した建物のガラス戸なども、ちゃんと鏡の役割を果たしてくれる。

鏡をのぞく。そこに写っているのは自分である。が、いったいどうやって、それを「自分」であると確かめられるのだろうか。向うに写っているのは鏡像である。像とこの自分とをどうやって同定（アイデンティファイ）できるのだろう。これも面白い問題だ。

しかし、もつと面白いのは、鏡に写った自分の像を眺める私たちのまなざしである。ふつうは、ちょっとした髪型を直したり、化粧をしたりするだけであるように思えるが、はたしてそれだけだろうか。

実はこの時私たちのまなざしは分裂しているのである。少々表現はどうづく響くかも知れないが、この「分裂」の意味は単純ではない。まず、私たちのまなざしは、"自分"とおぼしき像に向かう。それがふつうの"見る"という行為である。だが、もうひとつまなざしはある。

もっと複雑である。それは次のように表現することができるだろう。「もし、私の顔を他の人が見たら、いまここで私が私の像を眺めているような形で他の人の目に映るだろう」ということである。私たちは、いまここにありながら、観念の上では「自分」と「他人」に分裂している。そして、このうちの後者は、私たちのまなざしに他人の目が憑り移っている状態に近いのである。

私たちは毎日鏡を見ていてから、こういうことの意味の重大さに気がつかないでいる。だが、ちょっと場面を変えてみると、初めて鏡をのぞき込んだ人類の驚きはいろいろな形で残っているように思われる。

### ナルキッソスの物語

ギリシャ神話に出てくるナルキッソスの物語を、存知だらう。彼は美少年ということになつてゐる。しかし、それまで自分の顔や姿を見たことがなかつた。

ある時のこと、彼はたまたま湖をのぞき込んだ。水面に美しい姿の少年が映つていた。彼はその像（自分の像）

に恋してしまったのである。

これを他愛もない話と軽くあしらつてはいけない。ナルキッソスは、水面に映じた像がほかならぬ自分のそれであると見分けることができなかつた。そして、自分の姿に恋い焦がれ、やつれにやつれて死んでしまつた。その魂は水仙になり、いまでも池のほとりで花を咲かせる、というのである。

鉢かづき姫の物語もこれに似ている。鏡に写つた自分の顔を亡き母の顔と思い込んで慰められたという物語は、こつけいなようでもあり、あわれでもある。

鏡が割れると不吉であるというような見方も、像の意味づけと関係がある。

幼児が鏡を見、そこに映つてゐる自分の像と戯れるのは大体六ヵ月ぐらいからであるといふ。他の高等哺乳動物なら、鏡に映つた像を自分のそれと同定できないので、恐怖におちいつたり、鏡を割つてしまつたりする。

そういう研究がある。また、ゴリラを例にしたテレビ番組もあつた。いろいろな大きさのゴリラが鏡におそるお

そる近づき、そこに写つた自分の姿を見て、あつけにとられてゐるよう、しばらくぼんやりしていたのは同情に値する。つまり、そのゴリラの胸のうちを人間のことばに直して表現すると、「おや、あそこにいる奴は見たことのない顔の奴だ」ということになるはずだから。

他の仲間の顔は自分の眼で見ているから見分けられることはない。しかし、ほかならぬ“自分”的顔をゴリラは見たことがなかつたからである。見たことがない顔。それは警戒すべき相手である。これがゴリラの反応の型であつた。

人間は、向こうに写つてゐるのがこの自分の顔であると同定できる。そして自分の像と戯れるかのように化粧をしたり、身だしなみを整えたりする。このとき、私たちのまなざしは「自分は他の人の眼にはこのように映じるのだ」ということを承知している。

恋人に逢いに行く若い人は、鏡の前では一瞬、相手のまなざしを自分のまなざしに憑り移らせて自分の姿を判断する。

## 像との戯れ

本当はこれは大変なできごとなのである。

ふつう、人間の子どもは生後一年ぐらいで言葉をおぼえるから右のようなできごとがそこでなされているというには見えない。あたりまえのことのように思え、何のふしきもない自明のことのように見える。だから、ふつうは、放つておいても自然とそこまで到達できるかのように思われている。現にそう見える。しかし、少し視野を広げてみると、この短かい歳月のあいだは大変なできごとが起つていて、いるといえるわけである。

ゴリラの場合と違つて、人間の子どもは自分の鏡像と戯れる。それと遊び、やがてその像がほかならぬ自分の像であることを知つていく。この間どのくらいの高峰をよじ登るのか。進化のあとが一年という短かい時間のなかに凝縮してあらわれるといったらよいだろうか。

答えはたぶん出なかろう。出てしまつたらつまらないのである。ひたすら向うことだけに張り（生命の張り）を感じる。他の動物がもしことばを話せたら、「やれ、やれ、人間という動物は神経質でいつも余計なことを考え、自分で自分を悩ませている」というように見えるかもしれない。

もっとも、動物がことばを話せたら、彼らも人間と同

面白い特性である。つまり、いまここに無いものを、あたかもあるかのように描き、それとかかわりをもとうとし、しかも持続できるというのだから。

じょうに「……とは何か」という問い合わせを発し続けるであろう。

そのあげく、彼らも「ノイローゼ」氣味になることは確実であろう。

問題は、この「ノイローゼ」が常の態となり、うまくいけば自分の存在をかえりみるという特性になるということにある。そのところは、古い時代からいろいろな概念で表現してきた。「汝自身を知れ」「反省」「現存」在」——いずれも單なる「ある」という次元を突破していこうとする、過剰なエネルギーのあらわれである。

それを哲学者だけの特権と見なしてはいけない。現にだれもがやっていることである。たとえば、空の雲を見る。その形は何か別のもののように見える。アイスクリームのようにも、船のようにも、その他もろの何かのように見える。「入道雲」という名称はこれらと同じレベルにあるといえよう。このときの「何か別のカタチに見える」ということと、「私にとって」そう見えるということがカンジンなのである。

## 初心に還れということ

人はよく「初心に還れ」ということばを使う。多くはそれを誤解しているようである。なぜなら、ふつうそのことばは「何かを始めたばかりの純心な心を思い出せ」くらいの意味で説かれている。どなたもそう強調されたのを記憶しておられるに違いない。ところがどうも違うようなのだ。もし、心して「初心」を丹念に洗い直していくと、「純心」などは幻であることがわかつてくる。むしろ「初心」のまわりにはわけのわからぬ不安や恐れ、さらに期待などがあるかと思うと、「初心」の中心に近いところには混沌とした状態のみがあり、思い返すたびに赤面せざるをえなかつたり、テレurgia(思いで汗)が出てくるというのが本当のところである。

これを「純心」という幻想でとどめてしまうのは、本当に「初心に還って」いないからである。また、あのテレビや赤面をふたたび味わいたくないからである。

「初心」を「純心」と置き換えてしまうのは何とか体面を保持しようとする、よそ行きの顔つき、外の眼を気に

する顔つきのあらわれである。

夏、むくむくと空に姿をあらわした雲を見て大入道に擬したこと——それをなつかしく思い出す人もいる。それはそれでよいのである。この時、その人の心は、身は、身体のリズムは緩んでいるはずである。詩的言語として「入道雲」を用い、その時の気分は宇宙のリズムと合っていたのかもしれない。けれども、別の面もある。

いつまでも「入道雲」の段階でとどまつていても困るのだ。そこで、よく反省してみると、「入道雲」という表現も、実はだれかが使つていたのを仕入れたにすぎなかつたこともわかつてくる。その人が初めて発明したのではなかつた。

時がたつ。それまで「入道雲」で通じていた世界から、同じものを「積乱雲」という術語で呼ぶという約束事の世界を手に入れる。大方は、そういう世界が一挙にやつてくるのではなく、そういう一つ一つの単語を手がかりとしてゆづくりやつてくる。

「セキランウン」。いかにも何かで武装したことばだ。何

かで化粧しているよりも見える。「入道雲」の、擬人的な印象、民俗的な匂い、神話的な響きは、「セキランウン」にはない。あたかも磨かれた概念であるかのよう。実は、それは「乱雲」「積雲」などとシリーズになっている術語なのである。

ひとたびこのことばを手に入れると、たつたいままで使つていた「入道雲」がどこか稚<sup>おさな</sup>なく見え、それに満足していた自分がいかにも狭い世界に安住していたかのような氣分に襲われる。いいかえると、早急に古い世界から逃走したくなり、新しいピカピカの術語を使って見なくなる。カッコよく。

これも戯れの一種である。戯れであるが、自作自演ではだめなのである。観客がいてくれなければならない。そして「ふーむ。むずかしいコトバが使えるねえ」などと感に入つた応じ方をしてくれないと態にならない。あるいは観客はまだ「入道雲」などを使つている弟たちや妹たちでもよいのである。けげんそうな彼らの表情はそのまま「積乱雲」というむずかしい表現を使うことので

きる「わたし」の存在を照らし出すファットライトのようなものなのだから。

かくて、「初心」の全体を調べていくと、「純心」とは逆であることがいよいよ鮮明になってくる。その正体はキザな構造と指摘してもまちがいではないようだ。

でも、だれもまわりの人はそれをキザだと断罪せず、もつと別の表現で和らげてくれるようである。「おしゃまなこと」「おお、よく使えるねえ、驚いたなあ」等々。

それをおせじだと思わず、まつとうに受けとめていた自分のキザっぽさに腹が立つのはずつとあとになつてからである。そのころは、もうあの「おせじ」やお愛想を言つてくれた人もとつくにそんなことのあつたのを忘れている。だからこちらも救われる。よくぞ忘れてくださいたと感激してもよいくらい。

生まじめな大先生にかかると、記憶が大切ということになるが、そんなに重い荷物をかかえて汗を流して歩くのはよくない。しかも、役に立たぬ知識やしがらみを引き連れてうんうんうめいて歩くのはよくない。人間は、余分なことはさっさと忘れている。身軽になつて新しい世界に飛び込んでいく。

一例を挙げよう。近くに保育園がある。園児たちは百人ぐらいである。毎年の四月、そこの園児たちのあいだにちょっととしたドラマが生まれる。一学年？ 進級するのでクラスの名前が変わり、胸の名札の色も変わる。クラスの名前は野菜の名からできている。

「ニンジン」「キャベツ」「ジャガイモ」等々。これだけではどれが年上だか、どれが年下なのかわからない。何でも一時は「ダイコン」組もあつたそうな。しかし、母親たちの間で猛反対が起き、改名されたのだそうだ。

子どもたちは平氣の平左だったのに、母親たちは日本

れている。けれども、まずは忘却という恵みに感謝しておこうことにしよう。

### 忘却という救済

以上を「子ども」の段階での一時的な夢と思つてはいけない。意外にも大のおとな世界にもそつくりあらわ

の伝統たる素朴実在論のトリコになつたのだろう。あるいは、「ダイコン」によつて何か別のものを連想し、その連想がおのれにはねかえり、「あら、いやな名」などと、したことになつたのかもしれない。何だか現代の呪術のよう。改名は一種のオハライだった。淨めがなされたのに等しい。

「おーい。ニンジンさんたち集まれーい」

こんな号令がきこえることもある。「キャベツさんたち早く並びなさい」などという声もきこえる。外から眺めていると、命名まことにみごとと感心するほどである。ここで三年以上過ごしていく幼児たちの日常生活はまったくにぎやかである。自由時間などには結構へなわぱり／＼争いが起ころる。

「何だ、おまえニンジンじゃねえか」  
「何よ、おまえなんかキャベツじゃないか」「やい、ニンジン」  
「やい、キャベツ」

））ういうわけで、時折奇妙なパラドックス（逆説）も

生じ、「おまえたちはヤサイじやないか」という変な表現が一方の子どもたちから出されることがある。すべて、これらは当人たちの記憶に残らない、ささやかなるドラマなのである。

よく学会のシンポジウムでもこれと似た状態が生まれるから面白い。当事者たちは気がつかないのがふつうだ。気がついていたらそんなことやれっこないだろう。

三月の下旬、日本中の幼稚園でも保育園でも卒園式が催される。第一子の卒業式に立ち合う親たちは初めての経験だからこそとして参列する。第二子以下の場合はもうその「いそいそ」は何分の一かに減っている。まるで、第一子のときの写真がやたらに多いのに、第二子になるとガタンと減つてゐるのに似ている。

さて、この儀式だ。何年間もお世話になつてきた幼児たちはきょうで卒園。晴れやかな気分と、ちょっとびりさびしい気分。というわけで卒園式の歌などが高らかにうたわれる。ダークダックスの「思い出のアルバム」をちよつとひねつた歌が圧倒的。その歌詞のなかにはまるで

幼児たちがこの園で過ごした生活のあれこれを永遠に忘れないと誓うかのような文句もある。

素朴実在論者にとつては、「永遠に忘れない」というイミの歌詞（実は歌詞そのものの引用をしたいのです）が、著作権法上の手続きが面倒なので、わざと遠まわしにします）は、子どもたちの正直な気持の表明ということなるので、感きわまつてはらはらと涙を出す先生がおられてもおかしくない。心清きん。

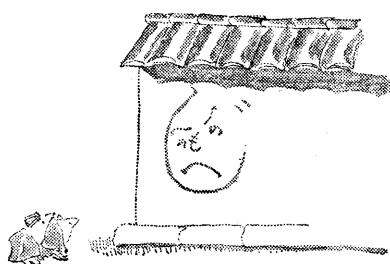
が、彼らにとつての「永遠」は、実のところ想像以上に短かい。まるでショートショート。ショート、ショーター、ショーテスト。

どのくらい？ 平均二週間である。近くの某保育園の道一つへだてたところの小学校の通用門は、保育園から五メートラぐらいしか離れていない。二週間前に卒園した幼児は、四月の初め「一年生」に変身してその門をくぐる。

保育園児のとき、横から眺めていたときの小学校と、いま生徒としてそこに入つていくときの違いは、空間的

に小学校がものすごく広い（おとなの感じ方の五倍ぐらい）と思えることと、学校が迷路のように複雑に見えるということである。すぐそばの保育園は、もう時間的にはるかかなたに去つた。保育園の先生から声をかけられるのを一年生は極度にきらう。はずかしいのである。同時に腹立たしいのである。そして、ちょっぴり悲しいのである。なぜなら「初心」はここでもキザなのだから。

（名古屋大学）

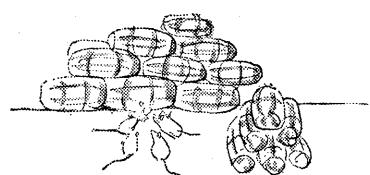


## 洞窟の話

閑

—

敏



1

ソウル市中心部をやや南西にはずれた地点に切頭山といふ小高い丘がある。議事堂や六〇階の超高層ビルディングの林立する汝矣島を漢江ごしに遠望できる見晴しのよい場所である。この地は韓國カトリックの殉教の聖地として知られている。一八六六年、数知れぬ信者たちが少數の例外をのぞいてその名はおろか、正確な数すら歴

史に記憶をとどめないままに処刑された。現在、丘の上には殉教記念館がたち、さほど広くはないが手入れのよきとどいた庭園を見おろしている。今年の五月三日、教皇ヨハネ・パウロ二世が野外ミサを開いた庭である。その庭のほうから殉教記念館を見ると、建物の下、漢江より丘の麓にぽつかりとコンクリート製のほら穴のあいているのが分る。穴の右上方に白い聖母像がおかれていて、なるほどルルドの洞窟を再現したものに違いない

い。左奥はさらに小さなくぼみになつてゐるから、あるいは水の流れで仕組みなのかもしれない。この夏、一〇日ほどの短い韓国行のなかで初めてこの洞窟の前に立つたときには、ちょうど五年前に訪れたルルドの光景がそこに重ねあわされてくるようだ、懐しいような、ちょつと口にもらさるをえぬような不思議な思いにとらわれた記憶がある。

同じような洞窟は日本にもいくつもある。東京でいえば、目白の閔口教会には原寸大の精巧な「ルルド」が庭に再現されている。フランス人神父ドマンジヨルの尽力によつて、一九一一年に作られたコンクリートの洞窟である。やや早目に出来あがつた名古屋の主税町教会の「ルルド」も、閔口教会のそれも、残念なことに奇蹟の泉はもつていないので、日本最初の洞窟模型である五島玉の浦（一八九九年）にはこれが備わつてゐる。正確には井戸からひかれた水であり、その水による病治しの奇蹟譚を今も残している（志村辰弥編著『ルルドの出作事』中央出版社、一九五八、第三一章）。模倣して作られ

た洞窟が新たに病治しの恩寵を与えた、新しい巡礼聖地を縮少的にうみだしたりすることは、各地方地方の札所めぐりや七福神めぐりが絶えず再生産されてきていることを考えれば、さほど奇異なことではない。分社、勧請の思想と類比的な思考法はヨーロッパにもみいだされるのであって、それはなばなし例のひとつがベルギーのオオスタッカードだった。はじめ洞窟状にデザインされた水槽の上方に、城主ド・クールブルヌ侯爵夫人がルルドの聖母像を安置した（一八七二年）といふ、巡礼者が集まりはじめ、やがてその洞窟での顯著な病治しが発生するようになつたと伝えられてくる（H.M. Gillett, *Famous Shrines of Our Lady*, Westminster, Maryland, 1950, pp. 214-8）。おひとむ、この場合の奇蹟発生の経緯は、この記事ではあわめて類型化されていて必ずしも明瞭ではない。さしあたりここでは、洞窟・水・聖母・奇蹟というセットに注目しておきたい。

オオスタッカーニ聖地のモデルを提供したルルドの出来事は、そのわずか一四年前、一八五八年のことである。その年の二月から七月にかけて一四歳の少女に白い服の女性が現われて、いくつかのメッセージを残した。少女の名はベルナデット・スピルーという。白い服の女性が現われるのはいつも同じ場所、ルルドの町はずれを流れる河（ガヴ・ド・ボー）に面したマサビエルの岩場だった。残された記録では計一八回の出現を数えていた。

最初の出現のもようをみてみよう。一八五八年二月一日の正午前、ベルナデットは妹と友達と一緒に岩場に現れた。河にしきられた一角に豚を放つ共用地があり、その西端から運河の浅瀬をわたれば岩場にぽっかりとあいたマサビエルの洞窟にいたる。せっせと浅瀬をわたってしまった連れの二人にとり残されて、ベルナデットは冷たい流れを前にためらっていた。喘息の持病があり、母親からむちやを禁じられていたからである。靴下をぬいで何と

か洞窟にたどりつこうとしているところに、突然「一陣の風」が耳をうつたという。訴るベルナデットにふたたび風の音が響きわたり、洞窟のやや右上の小さなくぼみにある野バラの枝々がざわめくのがみえた。そこに「柔和な光」につつまれた微笑があらわれ、白をまとった若い女性が人を招くように手をひろげて佇んでいた。恐れを感じたベルナデットはポケットのロザリオを手に十字を切ろうとするが震えて手が動かない。と、光の中の女性がロザリオをくりはじめたという。これを見て、ようやくベルナデットもひざまづいて祈ることができた。祈りののち、おいでという合図にためらう少女の前から突然その女性は姿を消してしまう。

この不思議な女性の出現を体験することができたのはベルナデットひとりだった。同行した妹の口から親や学校に話が伝わり、ふくれあがる噂のなかで洞窟に群れつた「信者」や「懷疑家」たちの数をいよいよ増していくのちも、この少女だけにしか光の女性がみえず、その声も他の者にはきこえなかつた状況にかわりはない。

洞窟に集まつた群れの数をあげてみると、四回目（八）  
五回目（三〇）六回目（一〇〇）……一回目（一一五  
〇）一四回目（三〇〇〇）とふえつづけて、一五回目に  
はなんと八〇〇〇という信じがたい数値に及んでいる。

この大群衆のなかで唯ひとりベルナデットだけが洞窟の  
女性と交信できたということは、それらの群れのすべて  
の目が、この少女の一挙手一投足に注がれる状況を生ん  
だ。もちろんその目のことごとく最初からベルナデット  
の神秘体験に共感していたわけではない。いっぽうには

少女につきまとつてその衣服の切れはしを手に入れよう  
とする狂信的な人々がおり、またいっぽうにはベルナデ

ットをかたりよばわりする嘲罵の渦があつた。さらにそ  
の周囲には、洞窟に虜集する群れに治安の関心をいだく  
町当局（役場・警察・裁判所）や、宗教上の関心からな  
りゆきを静観するルルド教会の人々がいた。ルルドの出  
来事には、だから一八回の出現をとおして、正確には一  
八回の出現時のベルナデットの所作や後からの説明をと  
おして、徐々に神秘体験への共感の輪をおしひろげてい  
つた過程をみることができる。七回目の出現時に初めて  
ベルナデットをみた知識人のひとりが、当時の美人女優  
ラッシュエルに少女を比したという逸話があるが、日常の  
起居動作をふくめて洞窟での出現体験をくりかえし多く  
の観客の前でなしのおせたという意味では、女優との比  
較は的はずれではない。とにかく彼女が自分ひとりの体  
験を神秘的な共有すべき出来事として群れへと伝え、そ  
こに共感の運動体を築きあげてきたことは一面の事実だ  
からである。

### 3

ルルドの出来事を演劇との類比から理解することは、  
ベルナデットの神秘体験そのものに疑いをもつもたない  
の立場とは何のかかわりもないことである。ベルナデッ  
トに限らず聖母出現の体験者すべてが置かれている共通  
の状況は、自分たちだけの超越的な体験が一方にあり、  
他方にその体験から何事かのメッセージを受けとめよう  
とする（あるいは受けとめるのを拒む）一群の人々がい

るという構図である。しかもそのメッセージが体験者の

知覚（みる・読む・ふれる・きく）を媒介しながら知覚を越えた彼岸からのものである以上、体験者による伝達が周囲の非体験者たちを巻きこむためには何らかの説得性がそこにそなわっていなければならない。いいかえれば、神秘体験者は神秘体験をみごとに演じきらねばならないことになる。

ベルナデットが洞窟の不思議な体験を演じきるためにには、大きく分けて次の三つの、あやうい段階をくぐりぬける必要があった。「あやうい」というのはベルナデットを媒介としてこの世に送りこまれる超自然的存在からのメッセージが、夢・世迷言・狂人のたわ言として一笑に付されたり、悪霊のたぶらかしとして否定的に受けとめられたりする可能性をおおいに含んでいた分岐点のことである。

- (1) 「悪霊」説（二回目、二月一四日）と「煉獄の魂」説（三回目、二月一八日）  
(2) 泉の発生（九回目、二月二五日）

(3) 司祭の要求（一三一五回、三月二一四日）

まず(1)の初期段階をみてみよう。注意しておきたいのは一八回の出現をとおしてベルナデット自身の口からは「聖母」という言葉が一度もはかれていないことである。

周囲の質問にも当局の尋問に対しても「婦人の形をした何か白いもの」とか「あれ」とかいう呼び方をしている。一体それが何者なのか、本当に聖母なのか、という執拗な問いは洞窟のまわりに群がる人々のものであつてベルナデットのものではなかつた。そしてこの問い合わせらかの根拠をもつた答をみいだしていったのもまたベルナデット本人ではなかつた。「悪霊」説や「煉獄の魂」

説といふのはそうした周囲の人々による解答の試みのひとつであり、ベルナデットの所作や伝えるメッセージはそこにさまざまな判断の材料を提供していくのである。たとえば、洞窟の出現が悪霊ではないかという疑いは噂のひろがりはじめたごく初期のうちから家族や小学校のなかに生じていた。同じクラスの少女たちと出かけた二回目の出現では、この疑いを確かめるためにルルド

教会から聖水をもつていて洞窟にありかけている。その時「あれ」は微笑でこたえたとベルナデットは仲間にちに説明した。こうした出来事は「悪霊」説を否定するひとつの宗教的根拠を与えるだろう。

同じような実験は「煉獄の魂」説についても試みられている。「幼きマリアの会」(カトリックの在俗信者団体)のある夫人が、前年の秋に死んだ篤信の女性エリザの靈ではないかという疑いをいだいた。出現する女性の名を確認するために、この夫人はベルナデットに紙とペンを預けた。三回目の出現のことである。出現中にベルナデットはこれを洞窟の方にさしだすみぶりをしたが、紙には何の文字も残されないまま出現は終ってしまった。ベルナデットによれば「その必要はない」と洞窟の女性がいったという。このエピソードは煉獄をめぐる民衆的信仰を考えないと分りにくい話である。中世カトリシズムは天国と地獄という二つの死後の世界に加えて、両者の中間項にあって天国への橋渡しをする煉獄界を発明した。一定期間ここで浄化をへた魂がやがて天国へと

到るための過渡的段階にあたり、これらの魂がすみやかに浄化されるには生者たちのミサが必要だと考えられていた。そしてミサ・祈り・断食の勵行を現世の人々にためるために、死者の靈は煉獄からこの世への舞いもどつてくるものと信じられたのである。その時に死靈が現われる相手は親類縁者もしくは擬似的な親族集団、つまり同じ宗教共同体に属するメンバーということになつていた (J. Le Goff, *la Naissance de purgatoire*, Paris, 1981, pp. 392-4)。

#### 4

煉獄の魂説とその実験がよく示すように、ルルドの出来事がどのようにして人々に解釈されていき、どのように聖母出現の信憑性を高めていったのかを知るために、こうした摩訶不思議な現象をめぐって民衆文化が蓄積してきた伝承的背景とでもいうべきものを考えなければならない。神秘体験者が神秘体験を演じきるということは、体験者の伝えるメッセージなりその所作なりが民

衆文化に内在する出来事の解釈粹にそむくことなく、ふさわしい要素のふさわしい組合せによって一貫した物語をそこに構築することである。(2)の泉の発生はこの「ふさわしい要素」の最たるものひとつだが、加えて何故主人公が一四歳の少女であったかなども「ふさわしさ」にかかるテーマである。

聖母出現をめぐる「ふさわしさ」の体系として「羊飼い伝説群」とよばれる伝承があった。その基本的要素には、子供もしくは若い羊飼いの娘への出現、聖母のメッセージ、奇蹟の泉、自然発生的な巡礼、礼拝堂の建立、その場所の不思議を記録する活動的な司祭の登場、などがある。もちろんこうした中世的伝承類型がたんに文化表象として宙にういていたわけではない。ユイスマンが指摘していることだが、ピレネー山麓一帯には一九世紀ルルドに先行する数多くの聖母巡礼地が点在している。

タルブ司教区のエア、バルバサン、サンサバン、ガレゾン、バイヨンヌ司教区のベタラムなど、いずれも聖母出現の類型をふみながら一六世紀以前に成立した聖地である。J.-K. Huysmans, *les Foules de Lourdes*, Paris, 1906, pp. 2-12)。したがってルルドを突発的な孤立した奇蹟の町と考えるのはまちがっている。むしろそれはビゴール地方の聖母出現文化をふまえた複数の事例のひとつであり、一九世紀ルルドにおいても類似の経験はベルナデットひとりのものではなかった。つまり問題は何故とりたててベルナデットの洞窟体験が広く受容され信仰を集めてきたのか、何故とりたててルルドの出来事が……というところにある。宗教的には先にあげた(2)が、教会史的には(3)がこの点に深くかかわってくる。

## 5

二月二十五日の九回目の出現をきっかけに洞窟には泉が湧きはじめたと伝えられつづく。のちに幾多の病治しで世界的規模の信仰をあつめ、現在もなお年間三百万を越える巡礼者を魅了しつづけている奇蹟の泉のことである。この日、ベルナデットに「泉の水を飲み、洗いなさい」というお告げが下った。その時にはまだ洞窟に泉は

なかつたので、ためらいがちに河にもどりかけるのを「あれ」が呼び返す。とまどうベルナデットの行手、洞窟つきあたりの左奥に水氣をふくんだ赤い泥土があつた。これを手でほりおこして穴をあけ、泥水をくり返しすぐつて四度目にようやく口に含むことができた。もう一度すくいあげた水で顔を洗うと、さらにあたりの雑草を口に入れて食べるようすをみせる。出現が終つた時、ベルナデットの顔はひどい汚れようだつたといふ。

この日の出来事は事態をみまもる人々に大きなショックを与えた。とりわけ二日ほど前から洞窟に足を運びはじめていた知識階級の人々にとって、泥水を口にふくみ、草を食べる少女の姿は落胆と疑惑の対象になつた。この雑草（正確にはユキノシタ科ネコノメソウ属——山足の湿地や谷間に普通にみられる多年草）については、その後の司祭やタルブ司教らによる尋問の焦点のひとつとなつた。つまり「草を食べさせるといえのは聖母にふさわしいとは思われない」（司教）というのである。これに対するベルナデットの答えは「私たちはサラダを食

べます」（一八六〇・一一・七）という人をくつたものだった。雑草をめぐるベルナデットの所作は、こうした獸や魔魔的存在への疑惑を聖職者たちに生むことはあっても、その後もついに何の奇蹟も実現せず、何の宗教的意味づけも与えられないままに放置されてきた部分である。「ふさわしさ」の体系とのかかわりでいえば、基本的類型に收まりきらない異質の要素であり、解釈粹をみ出したあやうい部分である。

ところが洞窟に泉（らしきもの）が湧きはじめたことは、こうした「あやうさ」を吹きとばす効果をもつていた。その日の午後、ベルナデットの掘つた穴を棒で押しひろげると水が湧きはじめ、掘るにつれて透明になつていったという。これが「奇蹟の泉」の評判を得るようになるのは三月以降のことだが、当日すでに病気の家族に水をもち帰つた人々があらわれている。ということは、この泉という要素の介入がピレネー山麓の水にまつわる民俗的価値（奇蹟の水の治癒力への信仰）を吸収し、聖母出現譚の類型的完成をはたしたということである。聖

母と洞窟の群れをつなぐ唯一の仲介者だったベルナデットはその役目を終え、教会と聖母をつなぐ次の役割を負いつつあった。ベルナデットという生きたパイプ役のかわりに洞窟が得たのは、泉の水という恒常的な奇蹟の媒体であり、他界との交通路であった。つまり洞窟はそれ自身の宗教的完成によつてベルナデットを不要としはじめていたのである。

## 6

ルルド教会と直接交信するようになつてからの聖母（といふかベルナデット）の物語については簡単に経過だけをのべておこう。三月二日（一三回目）、「行列」と「礼拝堂」の要求を受けたベルナデットは初めて教会にメッセージを伝える。司祭の返答は、洞窟に現われたという要求主の「名前」と「奇蹟」の二つだった。三月二十五日（一六回目）、出現の女性はようやく「私は無原罪の宿りです」との回答を与える。これは教会史的に決定的な意味をもつ言葉だった。四年前の一八五四年、教皇

による「聖母無原罪の御宿り」の宣言がなされており、これをルルドに現われた聖母自身が追認する形になつたからである。

四月から七月にかけて警察の干渉にもかかわらず洞窟ではベルナデット以外の少女たち、子供たちの神秘体験が続発した。洞窟を中心にみれば、まずベルナデットの媒介によつて他界との通路を恒常的に確保するにいたつた洞窟空間が、ここではさらに新たな不思議を人々に経験させる段階にまで到達したことになる。冒頭にのべた世界各地のルルドの複製も、こうしたプロセスの延長線上に位置することがらである。残念なことに、この段階ではもはや子供たちの登場する余地がない。

||この項終り||

（筑波大学）

# いろいろなことを教えてくれる子どもたち (七)

村石京子

今月は、いろいろな生き物と子どもたちとのふれあいの中から、幾つかとりあげて書いてみたいと思います。

## ○蜂の巣のこと

暑かった長い夏も終つて、二学期がはじまりました。ところが子どもたちが元気いっぱいに庭をかけまわる時期なのに、学期早々にちょっと困ったことがあります。

時々蜂を見つからぬようにそつと行って「蜂の巣、大きくなつたわね」と眺めたりしていましたが、勿論テラスではあそべませんし、庭にも蜂の飛びかう姿が見られてはうかうかしていられません。

それは幼稚園のゆうぎ室のテラスのはり出した屋根の下に、すづめ蜂が巣をかけていたのです。蜂の数は三、四匹しき見当らず、そのせいか学期末頃

に発見したときにはほんの小さなかたまりでしたが、夏の二ヶ月間に蜂たちはせつせとかべをぬり続けて、九月始ましたときにはボール玉程になつていました。しかも、まだ巣は工事中らしく、蜂はしおりゅう出入りしています。

をあざかる環境では危険が起こってはいけないの  
で、取りこわすことにしました。巣だけそっと残し  
ておきたいとも思いましたが、どうも無理なようで  
取りこわしました。

「蜂の巣どうしたの?」 「蜂が追いかけてきて刺す  
といけないので、こわしたの。」などという説明で、  
蜂がいなくなつてよかつたと安心する子どもと、せ  
っかく見ていたのにと思う子どもとあつたとようで  
すが、幼稚園では安全管理を重視しなければならな  
いということに落ちつきました。

ところが、取りこわして数日経つと何とまた同じ  
場所で家作りの作業がはじまつたのです。三四位の  
蜂がうろうろしながら、以前の場所にはりついてい  
ます。「また蜂が来たの。お家がないつていってい  
る。」「また、作り出したみたい」と、ちょうどゆう  
ぎ室のテラスに一番近いところに保育室のあるせい  
か、代り代り興味をもつて、蜂のことを話にきま  
す。けれど一度巣をこわされた蜂は、以前よりずつ  
と警戒心が強くなつたような感じで、低空飛行をし  
ながら時には保育室の窓から入つて来たりすること  
もあって、「巣をこわしたから復讐に来るんだよ。  
今度はこわさない方がいいよ。」という五才児の声も  
ありましたが、あまり大きくならないうちに再度と  
りこわしました。そして、さすがにもう二度目に  
は、蜂の姿も見えなくなり、大人たちはホッとした  
ものです。

数日経つてある女の子が言いました。「おゆうぎ  
室のテラスのところは、みんなのあそび場だから駄  
目なのね。今度は、みんなのそばでないところに立  
派なお家作るかもね。幼稚園でないとところにつくれ  
ば大丈夫よね。蜂はもう遠くのお山まで行つたのだ  
といいわね。」と私に語りかけてくれました。その時  
は何か心のどこかに残つていたものを拭いさつても  
らつたような安堵感を覚えるとともに、四才児にな  
りでなく、このような受けとめ方が出来る子ども

もあるのだということを知り得た体験でもあります  
た。

### ○目のわるい金魚

園の夫々の保育室では、金魚、めだか、どじょう、ざりがに、かめ、その他いろいろと飼育しています。そうした小さな飼育物に接するとき、よく傍へ行ってじっと眺めている子ども、えさをやるのが好きな子ども、ちょっとつづいてみたくなったりする子どもと様々です。私の級でも、金魚やその他飼つてしまましたが、この夏の暑さのためか、一学期に飼っていた金魚は全滅してしまいました。

水槽の中で赤い金魚がゆらゆら泳いでいるのを見るのは、何となく優しくのどかになります。二学期の始まる前に早速、近所の金魚屋さんに行って、新しい金魚を五匹買ってきて水槽の中へ入れておきました。一見以前と何のかわりもなく、金魚はゆっくり泳いでいます。

三日ばかりたったある朝、T男が言いました。

「ねえ、先生、あの金魚前のとかわったの？」私はびっくりして聞きました。「E、どうして？」「だって赤いところの模様が前のとちがうみたい。」私はT君のなみなみなならぬ細かな観察力と、二ヶ月も以前のことなのによく覚えていたその記憶力に感心しながら、事情を説明しました。「毎日、お水をとりかえてあげればよかつたね。」とT君の意見、全くもつともだと思いました。

次の日T男は朝登園すると、また金魚を眺めていました。「先生、一匹、目の見えないのがいるみたい。目が白いよ」と言います。私はあれ、病氣にでもなったのかしらと思いながら、T男のいう金魚をよく見ると、確かに他の金魚より片方の目の黒目が小さくて、白っぽく見えるのがいます。言われるまで全く気づきませんでした。でもそれは、白赤のまだら模様がちょうど目のところと重なったために、そのように見えるようでもありますし、よくよく見ても

目が見えないのか、それとも模様なのか区別がつきません。それでT男には私の感じたままを説明をす

ると、「かあいそだね。目が白くて。」と言いました。

この会話があつてから後、私はえさをやるときとか、水をかえるとき、いつもこの白い目の金魚がどうしているかしらと気になります。そして仲間たちにまじって元気にゆらゆら泳いでいるのを眺めては、嬉しくなるこの頃なのです。

### ○はとの死

連休の翌日、園庭を通つて山へ行く道にはとの死んだのが落ちていました。子どもたちの登園する前に仕末をしておけばよかつたのですが、曲った小道のため気づかないでいました。「先生、大へん、鳥が死んでる。」「早く来て。」「気持わるいー。」見つけた子どもたちは口々に呼びたてます。大いそぎで行つてみると、野良猫にでもやられたのか一羽のはと

が無残な姿になつて、道に横たわっていました。

いつもはおつとり刀でかけつける元気な男の子たちも、さすがに手が出せずに見て います。そのままにしておくわけにもいかないので、大きなスコップを取つて来ておそるおそるのせて、さあどうしたものが、用務員さんにでも応援をたのもうかしらと思つているところへ、「お墓つくつて埋めてあげなくちやかあいそだよ。」といふH夫の提案です。行き掛かり上、やむなく私ははとをのせたスコップをそろつと持つて山へ行き、すみの方に埋めることにしました。金魚やおたまじやくしのお墓なら簡単につくれますが、鳩のお墓はかなり深くほつて埋めなくてはなりません。私にとつてはどうも難事業でしたが、ことの成り行きやいかにと、かたづをのんで見守る子どもたちの前では勇氣をふるい起こさなければいけにはいきません。やつと掘つた穴の中へ埋めて、土をかけてやると遠まきにしていた子どもたちも安心したのか、葉っぱや小さな花などを夫々に摘

んでは、お墓にかざり、小さな手を合わせてナムナムと拝んでいます。もし、はとに魂があつたら、きっとどんなにか喜こんだことでしょう。

そして次の日のことです。H夫は私を「お山へ行きましょう」と誘つてこう言いました。「昨日のはとのお墓のお花が枯れているかもしだいから、新しいお花とりかえてあげましょうね。」と。

### ○やもりの子ども

その他にも、いろいろな出来事が毎日のように織りなされていきます。ある日は、保育室の中で、小さなやもりを見つけました。エリマキトカゲでとば族は一躍勇名をはせたためか、見つけた男の子たちは「トカゲだ、トカゲだ」と喜んで部屋中を追いかけて、とうとうつかまえて首尾よく飼育箱に入れました。けれど数日すると、その小さなやもりは連休前には水分不足で細くなってしましました。

子どもたちが帰ってしまった保育室で、私は一人しばし思案しましたが、やはり草のかげに放してやりました。

休み明けに空になつた飼育箱に気づいたM男は「トカゲいないよ。どうしたの?」と聞くので、おなかがすいたみたいなので、逃がしてあげたのよ」と話すと、「じゃあ、お母さんのところへ帰ったんだよ。よかつたね。」と言つてくれました。

子どもたちと小さな生き物たちとのふれあい、まだだいくらであります。そしてその中で子どもたちは、小さな生命の死を知つておどろいたり、あるとときは新しい生命の誕生に感動したりしながら、そのふれあいを通して子どもたち自身優しさを育てています。そしてまた私にも、いろいろな暖かい心を伝えてくれる嬉しい折々となつてているのです。

(お茶の水女子大附属幼稚園)

## お伽の国へ



燕木寿江

バスが見えたよ バス来たぞ  
小さい組から乗るんだよ

うれしい顔がやつてくる

みかけた顔が声かける

おはよう おはよう おはよう と

大声だす子や ださぬ子や

だんまりこくつて乗る子ども

それでも口もと笑ってる

それでも その眼が語ってる

お伽の国へ行くバスか

おいしいおべんとう 持つてるよ

止まるたんびにお友達が  
一人 二人と ふえてくる

春は 莓の白い花

夏は 背たか月見草

秋は 栗のいがいがが

冬は 白さぎさがす川

お伽の国につきました

大きな軍手に包まれて

小さいお手てが降りてくる

握手がこの入場券

どの子も走るお部屋まで

好きな先生まっている

きょうはお花のブラウスに  
ちよつとかわった髪がたち

あゆみシールのこのグラス  
赤にしようか 青がいい

「いわさないで」と頼んでた

積木の船に人形が 二つ並んで乗っている  
昨日 かくしたブロックは  
どこへいったかわからない  
それより早く飛行機の運転台があいてるぞ

葛の葉好きな白うさぎ  
菜っぱの好きないんこうと  
尾っぽの長いきんけい鳥  
鳥小屋掃除の先生の  
うしろにかくれて入ろうか

お迎えバスの早いこと

もつと遊んでいたいのに

白い軍手の手がまねく

「おかえりなさい」をくりかえす  
よごれた服と 陽の匂い

それが かえりのキップです

からのおべんと 音たてて  
座れば とろんと 夢の中  
遊び疲れてねむる子を  
かかえて降ろすお伽バス

ままごと遊びのかあさんに  
きょうこそなろうと 朝早く  
摘んだ二本の赤まんま  
お皿にのせて友達の  
来るのを少し待ってよか

さよなら さよなら またあした  
さよなら さよなら またあした

## 子どもが遊びを妨げられるとき

津  
守  
真



新学年が始まった四月から、五、六月を経て、一学期も終りに近づくと、子どもをも、自分をも、ゆとりをもつて見ることができるようになる。新学年がはじまったころには、前年度からひきつづいた子どもも、前より行動が悪化したようすら思え、この先どのようになるのか、いつまでも同じ状態がつづくのではないかと、保育の日日を重く感じられることがしばしばであった。これ

保育の記述

は、たえず新たな事態に直面しながら成長する子どもの保育に、必然的に付随することなのだと思う。その停滞と前進の日々をくり返した後に、この時期のことを見直し、その中で積み重ねられている。子どもと大人の生活の基本的体験を考えてみたいと思う。

新学年度、四月の最初の日、T夫は部屋に入つてき  
て、おもちゃ棚にいった。前学期、母親から離れないこ  
との多かったT夫が、この月、自分からおもちゃ棚へと  
歩いていったので、私はT夫が十分に遊べるようにした  
いと思い、後についていった。

T夫は、電車の入つている籠から電車を出して棚にお  
いた。次々に取出して三台並べた。T夫は私が離れて  
動きはじめていた。そこにH男がきて、T夫が棚に並べ  
た電車のひとつをもつていった。T夫は電車をとられる  
と泣きそうになつて私の膝にくつつく。私が何か言つた  
ので、H男はじきにその電車を棚においた。T夫はまた  
あそびはじめる。H男は、床に坐つて、そこにある電車  
や自動車に、鉛筆で何か書きはじめた。T夫は、棚の上  
に、十台くらい、自動車を一列に並べた。H男がきて、  
自動車をとつてゆくと、T夫は私の膝にくつつく。こう  
いうことを、数回くり返していた。

そこに、どのようにしてか思い出せないが、いつも小  
さい子どもの髪を引張るS夫がきた。はじめは何もしな  
いでいい工合だと思っていると、突然、S夫はT夫の髪  
を引張つた。私はT夫をかばう。T夫は私にぴったりと  
抱きつく。そのあと、T夫は私にくつついて離れなくな  
ってしまった。

保育に参与して子どもの行動を記述するときには、そ  
の記述が子どもの行動にとどまつていても、その背後に  
は、保育者の能動的な思ひがかくされている。それは意  
図というよりも、もっと広い意味で、子どもの生活が育  
つようになつていく能動的配慮である。私は、T夫が折角あ  
そびはじめた電車や自動車を、他の子どもに何度も持つ  
てゆかれ、そのたびにT夫は私の膝にくつつくので、こ  
れではT夫の自己実現の場とならないようと思つた。

ここに述べた子どもは三人であるが、T夫も、H男  
も、S夫も、いずれも十分にあそんでいない。それぞれ  
の子どもが、いかにして自分の活動を見出し、あそぶこ  
とができるようになるかという保育の実践的課題がここ  
にある。このような課題に対しても、どこにでも通用す

る一義的な解答を期待することはできない。日々の保育の、生きた多様な現象の中に身をおき、そのときの保育者自身の理解に従って決断し、行為し、そこに生れる現象を反省考察して、一步二歩すすむよりほかない。

この月のことについて、最初からもう一度ふり返ってみる。

### 電車を並べる

T夫は自分から部屋に入つてきて、電車のいれである籠にゆき、電車をとり出して棚の上においた。T夫は自発的に電車に関心をもつて玩具棚に近づいたのである。

T夫は、以前は哺入びんを口から離さないことが多かつた。それは、口唇の快感や母親の胸に依存して生活していたと云えよう。このときは、哺乳びんからも、大人からも離れて、自分から玩具棚にいったのであって、心が自發的に動き出している。心が内面で動きはじめたときには、内界に対応して、外界の対象にも、動く物を求める。

物をとられることと大人の身体に接着すること

T夫は、自分が並べた電車を他の子どもにとられた。

いま自發的に心が動いて遊びはじめたとき、その玩具を

T夫は、目の高さに、電車や自動車を、一台だけでなく、たくさん並べた。つまり、一台をおくと、次にもう一台を籠からとり出して、前の車の隣におく。次々に同じ動作をくり返す。同様のことが子どもの描写にもみられる。描写の中で、しばしば、自動車の車輪がたくさんかき並べられる。子どもは自動車が車輪をたくさん持っていると認識しているのではなく、スピードで走っていると認識している。実際、私共も、子どもと一緒に道ばたに立ち止り、眼前を走り去る自動車の車輪に注目するときには、多くの車輪が重なり合って見える。T夫が自動車をたくさん並べるのは、それによって動きの状態をつくっていると考えることができる。

T夫は、新学期の最初の朝、自分から何かをしはじめようとする心が動いていたと考えてよいと思う。

もち去られた。そのような意味のある物を取られることは、自分自身の世界の一部が空虚になることである。

空虚になつた部分は、何か他のものによつて補われなければならない。そのやり方は、子どもによつて異なるであります。T夫は、大人の膝にくつつき、大人の身体に接着することにより、その喪失感を補つた。

これまでの類似の事態におけるT夫のやり方は、最初は、哺乳びんをくわえることであつた。それから、大人の身体の中に侵入しもぐりこむかのように、大人に接着した。そして、大人の腕の中から離れない時期がつづいた。このように、外界に進出しようとしたときにひき起された喪失感は、身体的快感の獲得によつて補充するがT夫の仕方であつた。

どうして、とられた物をすぐに取り返さないのかと大人はすぐに考え易い。不甲斐ないと思う。けれども、こうしたときの態度や行動の仕方は、人によつていろいろである。また、大人の腕の中に快感を求めるのは消極的大嫌う人もいる。しかし、これは、空虚さをみたすた

めの、人間らしいやり方のひとつである。子どもは、決してその中にいつまでもどまるのではなく、自分の力で外界に出てゆくときがある。

物をとられたとき、子どもの側には、喪失感を生じるのみでなく、他面、その物がなくともやつてゆく自分自身の生活態勢をつくり直すことが必要になる。それができるまでは、子どもの内心に混乱が生じる。それを乗り越えて、新たな自分自身をつくり直すことは、人間の初期の基本的体験のひとつであろう。

障害をもつた子どもは、しばしば、物をとられても、とり返さない。子どもによつてはとられたことから生じる自分の中の空虚な部分を、空虚なままにしているのではないかと思われる。とり返す力もなく、喪失感を理解してくれる人もいないとき、子どもはひとり空虚なまま、みんなの中でたたずんでいるのではないか。

T夫の行動は、この点で一步積極的である。

他方、この電車をとつていったH男は、他人の物をと

る意図をもつていたのではない。H男にとっては、たまたまそこに置いてあった電車をとつて遊んだのである。

同じ電車でも、H男の場合は、T夫にとっての意味とは違う。彼は電車に鉛筆で何かをかき、印をつけた。日頃は、H男は、大人にマジックを持たせ、壁に字を書き並べさせることが多く、自分の手で電車に書くのはめづらしい。彼の心中にも、何か新たな動きが生じているのだろうと思われる。それが何であるかは、多くの特異な行動をする他の他の側面をあわせて考えてゆかねばならない。

この場面で、最初からT夫と一緒にいた私は、H男が普段とは違った、意味のあることをやっていることはわかつても、それ以上にかかわることができない。こまかい配慮を要する複数の子どもを保育するときの大人の側の悩みである。

### 髪を引張ること

S夫は、小さい子どもを見ると、すばやく走っていつ

て髪を引張る。そのことが、子どもたちや大人たちの間に波及的影響をひき起す。この日、はじめは何事も起らず、いい工合だと思っていたと、(こういう思い方が実は問題の端緒をつくっているのだが)突然(と私には思われた)S夫はT夫の髪を引張り、私はT夫をかばうことになった。その後、T夫は私にくついて離れなくなつた。

私がT夫と親しそうに一緒にいたことが、S夫に髪を引張らせるきっかけとなつた。この場合、むしろS夫に十分な保育をせねばならないとわかりながら、引張られる緊張した葛藤場面では、ただちにそれはなしがたい。

ここにも複数の子どもとかかわる大人の悩みがある。場面をかえ、日をあらためてなされなければならない。このことについては、後に詳しく考察してゆきたい。

### 自己実現させることのできない保育の一月

自分がかかわることによって、子どもが自己実現するのを体験するのが保育者である。それに対して、だれも

が十分にあそぶことができず、混乱したまま一日が終るとき、それは保育といえるのかという疑いが生じる。

そして、その一日を共に過した保育者は、外的な混乱に直面するのみでなく、内的にも、おちこんだ気持になる。

こういう日のことを考えてみると、保育の場には、保育者の能力の範囲をこえて、自己実現を妨げる。外的内

的諸力がはたらいているように思われる。物をとられ、物をとり、髪を引張って、活動を妨害する。そのいずれの子どもも、自分で満足する活動をしたいと心の奥で望んでいることは明らかであるのに、それにはまだ多くの人の助力を必要としている。しかも、現実の場では、保育者の範囲をこえて、相互の葛藤によって、皆が苛立つてしまう。

すでに数カ月を経た現在の時点からふりかえってみると、混乱の日があることも、保育の全体のひとつの過程であることが認識される。保育者の力をこえてはたら

く、保育の場を破壊する諸力によって、外部の状況も、保育の内面も混乱する時期があることは避けられない。その混乱の時期をのりこえることが、保育者としての成長のための基本的体験のひとつであると思う。育てる人は、事態がどんなに悲観的に見えようとも、どの子どもにも、建設的に自己実現する力が備えられていることを信じてゆくほかない。

混乱をのりこえる基本的体験は、子どもの成長の過程で、二、三才の時期になされる。そのときには、保育者に助けられ、支えられて、それが可能になる。その体験は、成長の各段階で、新たな生活の場で反復される。そして、その人が成人して保育者になったときに、人は混乱の時期にある子どもを支える者となることができる。

保育者は、実践の過程で、混乱した一日も、全体の過程のひとつの段階であるという眺望をもつことができるようになる。それは、日日の保育の現象を通して、人間の理解を深めてゆくことにより、一層、確実にされる。

## えのぐをぬりたくる

新学期が始まって数日後の朝、T夫は、また棚の上に電車を並べていた。S夫はそれを見て走り寄り、髪を引張り、足でけとばす。T夫は私の背中にしがみついてはなれない。私はT夫をつれて別の部屋にゆく。電車の絵本が開いていると、私の背中からおりて、それを見る。最後に、電車の絵のかいてある裏表紙を破り、放り投げた。それは、何度も遊びを中断された電車を拒否しているかのように見える行動であった。そして、他の子どもが傍に近寄るだけで、私にしがみついた。

しばらくして、T夫はおしゃこにいきたくなり、便所につれていった。そのとき、別の部屋の流しに絵のぐのびんが出ているのが見えた。T夫はそこにゆき、びんに手をいれ、えのぐを両手にぬりたくりはじめた。これはT夫から出た自発的な行為である。私は少し離れて見て、ることができた。T夫は水を出し、びんに水をいれ、色水をつくる。同じ水道の蛇口で、別の子どもが水で遊んでおり、しばらくは共存していた。机の上に違う色のえのぐのびんが置いてあり、それを一度ほど取りにくる。ときどきひとりで笑っている。えのぐを手にぬりたり、色水をつくることに快感を感じているのだろうか。えのぐは、T夫の心をひきつける物質のようである。色のついた半液体は、ぬるぬると身体に付着する。それが体についても、T夫は気にかけない。大人の場合には、半液体の物質と自分の身体との間には、はつきりした境界を設けて、ねばつく物質を排除する。T夫にはそのような気は起らない。

T夫は前から水に対しても関心をもっている。じょうろには特別な関心がある。以前からそうであるし、このころも、じょうろを見るときつと取りにゆく。じょうろの先から出てくる水は、自分の体内から出る排泄物と判断とした区別がないように思われる。

いま、えのぐの不透明な粘着力のある物質をいじるとき、あの哺乳びんをくわえているときの感覚に似た自己愛的快感を味わっているのではないかと思う。

しかし、いまや、T夫はその快感の中に閉じこめられ

ているだけではない。机の上にある別の色のえのぐのびんに目をつけて、そこまで歩いてとりにゆく。異った色の多様な外界を、自分の感覚と結合し、新たな物質の感覚をつくり出している。自分の快感の感覚を、多様な外界にひろげる外向的積極性が生れている。

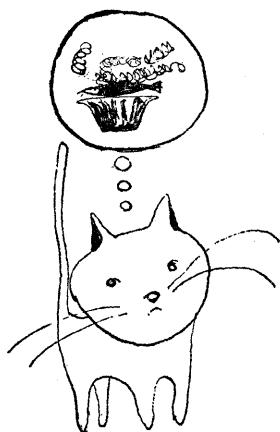
何度も他の子どもに遊んでいた物をとられ、活動を妨げられながらも、自分で何かをしようとするT夫の自発性は窒息させられることはなかつた。新学期のはじめ、自発的な心が動きはじめたときに、動く電車に関心をもつたが、その後の活動の内容は、電車である必要はない。むしろ、その後の活動の内容によって、その活動は選択され、発見されてゆく。

この日、その後の時間、T夫は、自分のクラスで弁当をたべ、機げんよくあそんで良い工合だつた。この後も、S夫に髪を引張られると、そのときは活動が中断し、大人にくつつくが、S夫が去ると、怒りを表現す

る。

T夫は、複数の子どもの中で、自発活動を妨げられない。また、それらの複数の子どもたちの中には、そこに生じるさまざまなできごとが、子どもの成長にとってプラスの体験となるように転換させてゆくのが保育である。ときによつて、困難があまりにも大きくなつて、直接の保育担当者だけでは解決できない部分もある。保育の場の外において、保育を理解し、力づけてくれる大人が必要なのである。

(愛育養護学校)



## 保育実習ノートから②

### ◆ TさんからK先生へ

一月十五日(水) くもり

年長みどり組

\*「お猿がひろった赤いろうそく」の音楽劇で使う炎をつくつてると、登園した子ども達が、「何やっているの?」と聞く。傍にやってきて見てるので、「つくってみる?」と聞くと、「やらない」と言って自分の遊びを始める。無理につくらせる必要はないと思ったが、声のかけ方でもまずい点があつたのかもしれない。それでも、てつやちゃんやなおみちゃんはかなり興味を示して何枚もつくっていた。てつやちゃんが一枚できた時に、「上手にできたわね、とってもすてき」と褒めたら「僕、もつとつくらうかな」と次々につくり始め、そのうちに他の友達にまで教えてあげるまでになつた。私の何気ない一言がてつやちゃんの意欲を多少なりとも引き出せたのだとしたら嬉しいのだが。この事に限らず、教師の一言が子どもに与える影響は大きいものであると思つた。

\*練習の時、「お母さんのつくったぼうしでないといやだ」と言つてなおみちゃんが泣き出してしまつた。教室でぼうしをかぶつたり、しつぽをつけたり、と準備している時に、なおみちゃんが「先生、私ぼうしないの、うちのお母さんつくれないんだもん」と言つてきたのだが、私はそれを「じやあ、先生に言つておいてあげるから」ということですませてしまつた。泣いているなおみちゃんを見て、私が子どもから発せられた言葉を表面的にしか促えておらず、その時のなおみちゃんの気持ちまで理解してあげられなかつたことを反省した。子どもはこちらの都合に関わらず、次々に話しかけてくる。それを全てきちんと聞いて……ということはむずかしいとは思うが、子ども達の言葉を受けとめようとする姿勢は失わずにいなくてはならないだろう。

泣いているなおみちゃんは一回目の練習には入らず、うしろで見ていたのだが、しばらくして様子を見ると小さな声で一緒に歌を歌つていた。やはり参加したい気持があつたのだろう。赤い目をしながらも一生懸命に二回目の練習に参加し

ていたので、終った時には思わず「よく頑張ったわ」と声をかけてしまった。何か自分のことの様に嬉しかったからである。子ども達と接し始めて日も浅いので、何か言わなくては、という気持が先走り、つくった言葉をかけてしまうことがある（例えば「わあ、すごいね」）しかし、これからは本心からの言葉かけができる様に、子どもの気持に立って保育をしていかなくてはいけない、と思った。

\* おかげりの時間になつても夢中で車をつくりているつねやすちゃん。時間で活動が区切られないで、子どもも自分の欲求を十分に満たすことができるのではないか、と思った。「楽しかったからまた明日この続きをしよう」と思えば、それが実現できる保育環境つてすてきだな、と思った。“つくりたい”“やりたい”という自主性を重視していくことは、とても大切なことであると思う。

### ◆ K先生からTさんへ

\* Tさんの保育日誌を読むと、私自身が、「生き直し」ができるような、そんな真剣な氣持になるのです。一番疲れている

筈の四時過ぎですが、張りつめて考えることはずばらしいことで、おかげさまで明日の力になるような、きょうの疲れをすっかり忘れさせてくれます。

\* 小さい声で歌つていたなおみちゃん、ごめんなさい。どんなにかさびしかつたでしょう。なおみちゃんの性格を知つていながら可哀想なことをしてしまいました。七夕とクリスマスは自分で作ったものの紙のお面、おひなまつりの会は、お母様方に縫つていただきた布地のお面をつかつてしているのですが、今までのがあるので、足りない分だけを補なつたのですが、なおみちゃんは弟さんが二人あるので、新たにお願いしなかつたのです。お母さんが一番いいのですね、「気をつかうより、頭をつかえ」とはこういうことなのです。この劇は、子ども達の好きな童話を音楽劇にしたので、始めから愛着があつて参加していたのに……反省させられました。

### ◆ TさんからK先生へ

二月十六日(木) はれ

年長みどり組

\* かずゆきちゃん達が、「先生、野球やろうよ」と誘つてくれた。男の子から「……しよう」と声をかけられたことに私は満足だった。この時、まゆちゃんが「先生と遊ぶ」と書いて一緒に野球を始めたのだが、やはり男の子の様にはいかない。そのうち「先生、別のこととして遊ぼう、私野球いやだ」と言い出した。しかし、野球はやりかけだし、男の子達も私の投げる球を打つのを楽しみにしている様だったので、「時計の長い針が4のところまできたら、まゆちゃんと遊びわ。それまで待つていでね」と言つて納得してもらつた。教室内ではともかく、外で一部の子どもの遊びの中にいると、やはり全体に目が届かないことが出て、子どもを把握することができなのではないか、こういう時の良い方法はないだらうか。

#### ◆K先生からTさんへ

一回、つくるたびに違うものができる積木は、大人の私が見ても楽しい。あつちゃんが帰つたあとは、まさやちゃん、りょういちちゃんが興味を示し、「地下には宝物が入っているんだ」と言つていろいろなものを入れていた。そしてその開閉に「ひらけゴマ！」と、先ほど見た紙芝居で使われた言葉を早速利用している。子どもは、おもしろいな、と思つたことはどんどん取り入れていくのだな、と思つた。

\* ゆうきちゃんやりょうちゃんたちは牛乳のふたにゴムをつけて、それを別の箱にとりつけて無線機のようなものをつけていた。あつちゃん、たかみちゃん、のりおちゃんなど積木で大きな基地を造つていた。みんな自分なりに工夫をこらしていた。特にあつちゃんはできあがった基地がとても気に入つたと見えて、得意そうにその構造を説明してくれた。そして、「明日までこわさないで」と言つて帰つていつた。一回

\* ままで遊んでいても、製作している子、積木をしている子のところへ行つては声をかける必要があれば話したり、又外でサッカーボールで遊んでいる子、飛行機に乗つている子、砂場にいる子と、先生の頭の中には常にクラス全員の子どものが把握されているわけです。例えば、ままで遊んでいたら、「飛行機のところのお友達が先生がくるのを待つて発車するんですって、ちょっと乗つてくるわね」と声をかけて外にくど、ままでの子も満足しますし、待つていた飛行機の子も満足すると思うのです。先生がチヨロチヨロと走りまわるのはめまぐるしいですし、落ちつかないの

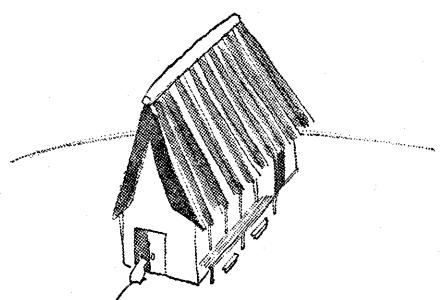
ですが、一つのところで腰をおろしてしまって、他の子どもへの配慮がおろそかになります。

#### ◆ K先生からTさんへ

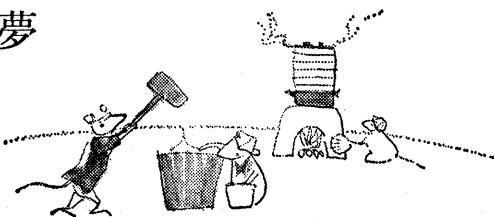
\* 「先生、手をだして」って、のりおちゃんがちり紙に包んだものをがさがさとあけて、大切にとりだしたもの……、小さな、小さな種……。「先生、みかんの種だよ」って、「ありがとう」と何度も言って、しつかり握っていました。「きのう、あんなに泣いて『めんね』ささやいているような、小さな白いみかんの種……、ありがとう、大事にするわ。

二月十七日(金) くもりのち雪 年長みどり組  
\* 今日は私から男の子達に、「先生も入れて、どっちのチームに入ればいい?」と言つて入れてもらつた。子ども達は私が本気を出した方が喜んでくれた。サッカーを通して、今まであまり接したことのなかつたともゆきちゃんやあきひろちゃんのりおちゃん達と接し、彼らの様子を少しでも知ることができとても良かつたと思う。

\* きのう、帽子を取り合つて泣いたのりおちゃんが、そのおかげで、にだらうか、みかんの種を持ってきてくれた。たかがみかんの種かもしれないが、のりおちゃんにしてみれば、いろいろ考えた末のことであったと思う。口に出して語れない子ども達の小さな心を、私は精一杯受け取めていきたい。



## 光る夢



芥川千代

私のモチーフに、兎がたくさん出てくるので、「兎歳ですか」とよく聞かれるのですがそうじやありませんのね。

私は、なんとなく月の光のイメージが好きできっと幼い時に聞いた『お月さんの中に兎がいる』というイメージからきているのじゃないかと思います。

月の光りの中で、そよそよと風が吹いて、草がゆれているという風景は、なんだか、もうあまり思い迷うこともない、静かで、透明な世界のように思えるのです。

又そういう、月夜の晩には、小川未明の童話のように胡蝶が娘にばけて、やつてくるように、眠っている人間の魂が、蝶や草花に姿を変えて、だれもいない草原で、遊び戯むれるような気がします。

私はそんなふうに、夜の草原で遊んでいる時に遠く露の中に、幻のような狐の嫁入りを見たのかもしれません。

そんなイメージを、ガラスに彫りこむようになつて五六年になると思いますが、ガラスという質材は、光をたいへん美しく見せてくれる質材で、シャープな光りも、ものうい光も、美しく映して、もうひとつ別な世界をつくり出してくれます。

誰れでも子供の頃、ビー玉に夕やけを映して見たり、コップをとお

して風景を見たりしたおぼえがあると思います。

縁日の裸電球の下で、かがやいていた。ガラス細工の動物を、子供の頃ためいきまじりに見つめていたのが、ガラスに恋がはじめかもしません。

それから何年しても、美術館の瑠璃の器の前で、溜め息まじりに、見つめている思いは、子供の頃とあんまり変わらないのじやないかしら。ガラスというのは魔性のものがあるのか、いったん魅せられてしまうと離れようもなく、引きつけられてしまうのはあの儂なさがあるのかしら。

恋がれて、やっと手に入れても、ふと壊れてしまつたりします。憎らしいことに、またその壊れた、破片のひとつひとつが、とっても美しかつたりするのです。

硝子というのは、作っている最中はけして素手でふれることのできないもので、猫つぼの中で、生き物のよう

にどうどろと、美しい炎色にとけている硝子を、長い吹き棹で巻きとり、棹の先きから、息を吹きこんで形をつてゆくのです。その言葉のとおり、命をふきこんで、

ゆくのです。

なんと親密な作り方なんでしょう。そんな作られ方にも、不思議な魅力があるようと思われます。

私は物を作ることを、なりわいにして、まだ何年もたつていないので、物というのは、たいへん正直なもので、こちらの気持を、すぐに読みとられてしまう、それは、たいへん恐いことで、誤魔化しょなく、その時の自分がそのまま出でてしまう。

何かを作つてゆくって、否応なく自分と真正面にむきあつて、ゆくよくなところがあつて、自分の作ったものを、人様にお見せしているつて言うことは、自分の魂やその心持を、ひらひらとお見せしているようなもので、今まで恐いもの知らずに、面白がつて作つてきたのですが、それはたいへん恐いことだと最近しみじみ思いました。

きれいなものは、それを作られた方の魂の清らかさみたいなものや、命のかがやきみたいなものを深く感じます。また卑しい作品とうつります。私は、物を作つてい



るのじやなくて、物を作ることによつて、自分を作つて  
いるのじやないかとこのじろ思います。

何の仕事でも、そうかもしませんが、ものを作る仕  
事というのは、はた目よりたいへん地味なことで、何度も同じことを繰り返したりとか、自分でもばがゆ  
いようなことが、いくらでもあり、時々やめてしまつ  
いとよく思います。

でも何だか、ずっと先の方に、とってもきれいな何か  
があつて、その美しい何かが、私において、おいで、を  
するのです。それでまた、こりもせずに作りはじめてし  
まいます。

ずっと先の光る夢まで、日常の中で、いくつも、いく  
つも雑用っぽいことをひとつ、ひとつこなしてゆくしか道  
がないのかもしませんが、いつたい、いつ光る夢にと  
どくのかしら。

(ガラス工芸家)

# 子どもと椅子の関わりをめぐつて

佐治由美子

## 〈はじめに〉

短大の教育実習生が、附属幼稚園の三才児を対象とし

て「フルーツ・バスケット」の遊びを試みたときのことである。子ども達は、果物の名で呼ばれて同じ果物に当たっている者同士で席を入れ替わるという場面になったときに、自分の席を離れることに抵抗を示し、そのため遊びは中断せざるを得なくなつた。しかし、その後実習生からクラス担任へと引き継がれ、長期間にわたつてその遊びが展開していく中で、子ども達は次第に遊びの

ルールを理解し、それと同時に自分の席へのこだわりも解消して、ついに自分達の遊びとして消化するに至つた。

本研究は、三才児には難しいと思われるこの遊びがどのようなプロセスを経て子ども達に理解され受け入れられていったのかという点について、いわゆる子どもの認識の発達という側面からではなく、広く子どもの自己の発達の側面から解明することを目的としている。特に子どもと椅子の関わり合いに焦点を当て、子どもが椅子といふ“もの”に対してどのような関わりをするかという

問い合わせに即して、子どもの身体の中に表現されている自己のあり様を考察するものである。

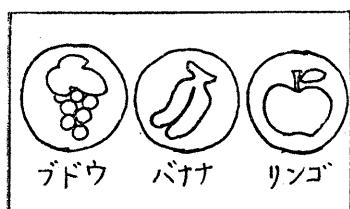
### 〈研究の方法〉

本研究は、保育の実践に基づく研究であり、保育者の書き留めた保育記録をもとに進められている。その方法は、記録を通して与えられた情報をより精確なものにするために保育者との面談も合わせて行なうが、あくまでもその記述に即して考察していく、いわゆる現象学的手法を用いている。

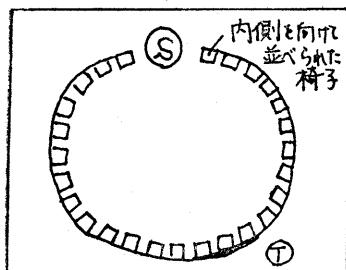
資料としては、短大附属シオン山幼稚園三才児クラス二十六名（たんぽぽ組、男児十四名・女児十二名）と短大保育科二年生Sとの保育場面に始まり、その後クラス担任Tへと引き継がれ展開していく一つの遊びの様相を、Tの思い出し記録の中から抽出し引用している。

### 〈記録と考察〉

記録一 一九八三・一〇・三



▲図1



▲図2

まず、用意しておいた三種類の絵カードを(図1参照)、Sは子ども達全員に一枚ずつ、着席している順番に配る(図2参照)。カードをもらった子ども達は互いにその絵を確かめ合うが、Sも再度確認を行なう。

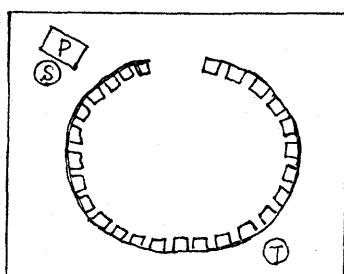
次に、Sはルールの説明(Sが「ブドウ」と言つたら、ブドウの絵カードを持っている子ども同士で席を入れ替わる)をし、実際に行なってみる。が、このときにはほとんどの子どもに遊びのルールが理解されておらず、遊びのおもしろさ

にも気づかないままに終わる。

Sのルールの説明のしかたが子ども達にわかりにくかったことがあるが、それ以上に、座席を替わることが困難だったようと思われる。

たんぽぽ組の子ども達は、集会活動のために椅子が用意されるといつても、まず自分の椅子を確保しようと急いで着席している。しかもその座席は、親しい友達と隣り合わせになるように考慮して選ばれている。

このような子ども達に対し、実習生Sは絵カードを用意してそれぞれに割り当てられた果物がわかりやすいように工夫したのだが、ルールの内容については十分に理解させていたとはいえない。それ以上に、子ども達は自分の席を離れることに困難を感じていたようである。自分の安定できる場としてようやく確保した座席を、遊びの中ですぐさま手放さなければならぬというルールが、子ども達に了解されないまま始められていたといえよう。



▲図3

記録二 一九八三・一〇・一四  
実習生Sは、再度「フルーツ・バスケット」の遊びを試みた。

Sは、まず果物の絵カードを裏返しにして一枚ずつ配り、何のカードを持っているかを確認した。今日のルールは、果物達が散歩に出かけていき（円形に並べた椅子の回りをピアノのリズムに合わせて歩く）、ピアノの音が止まつたら全員その場に座り、名まえを呼ばれた。

に座り、名まえを呼ばれた

果物のみ移動して椅子に座る（座席は子どもが自由に選ぶ）。  
というものだった（図3参照）。

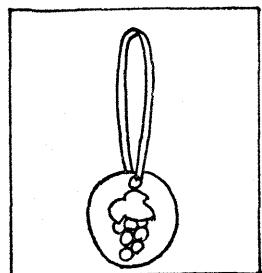
子ども達は、ルールをかなりよく理解していたが、椅子に座るときには、やはり初めに座っていた席に戻らうとしていた。

前日には子ども達にルールが理解されていなかつたこ

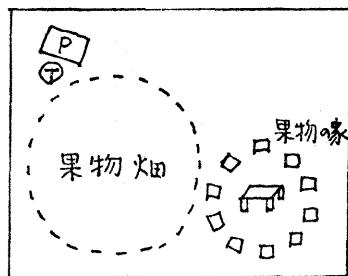
との反省から、実習生Sは、まず絵カードを裏返しにして配り、カードの絵の認知を容易にした。その上で、初めて全員が座席を離れるようにし、その後に指示された者だけが椅子に座るというようにルールを変更した。すると子ども達は、座席を離れること自体には抵抗を示さなくなつたが、椅子に座る場面になると、座席は自由であることを説明しておいても、それまで座っていた席に戻らうとしたのである。

椅子に座るときには、一時的に座らされていた床の上から自分で確保した愛着のある椅子の上に戻ることによつて、子ども達は安定感を得ようと努めていたと考えられる。子ども達は、最終的に自分の確保した座席に戻ることができるかどうかというところに遊びとしてのおもしろさを見出し、そのスリル感を積極的に楽しんでいたといえよう。

### 記録三 一九八三・一〇・一七



▲図4



▲図5

座席を離れることについては、全員が一斉に行動するので、自分の席が他の者に取られてしまうという心配もなく、淡々と行なうことができたようである。しかし、

実習生Sが残していった絵カードに紐をつけ、首から下げるようにしておいた（図4参照）。

初めに、子ども達が自分の好きな果物を選びとつて首に下げるようにし、確認を行なう。

遊びのルールとしては、

①果物達が煙でピアノのメロディに合わせて踊っている。

②ピアノの音が止まつたらその場に座る。

③そこへリスTがやって来て「ブドウを食べたい」と言つたら、ブドウになっている子どもは食べられないように家にげ帰る。

というものである（図5参照）。

そこでまず、皆で果物の家を作る。場所を決めて椅子を小さな円形に並べ直す（椅子の数は最も多い果物の数に合わせ、残つた椅子は果物煙を広くとるために片付ける）。家らしく見えるように部屋の真中にテーブルを置くことになる。

こうして果物になりきつた子ども達は、保育室中を駆け回つて遊ぶ。時々、「リスが大勢でやってきたので、リンゴとバナナを食べることにしよう」とふたつの果物に指示を与えると、実際には椅子の数が足りなくなるのだが、子ども達は

椅子を奪い合うこともなく、家の中の床の空いている所にでもスムーズに座ることができた。また、家の入口を幾つも設けておいたので、入り込むときの混雑は防ぐことができた。

この日の子ども達は、自分の確保した椅子にこだわることなくスムーズに座ることができている。ルールについても完全に理解し、遊びとしても十分に楽しむことができたようである。この日の遊びについては、特徴的なことを幾つか挙げることができる。

まず第一に、絵カードが保育者からあてがわれたものではなく、自分の好きな果物を選べるようになつてい る。しかもそれは、手を持つのではなく、首から下げるよう作りかえられているのである。子ども達は、自分で選びとつたものに対して、首に通して身につけるという動作を伴なうことによつて、それを完全に自分のものとして一体化することができたと考えられる。この時点ですでに、子ども達は現実の世界から離れ、果物になりきつて動き始めたと捉えられる。

また第二に、子ども達は初めに座っていた椅子を並べ変え、皆で家作りをしている。そのことを通して、個人の所有物としての椅子から、果物の家の椅子すなわち共

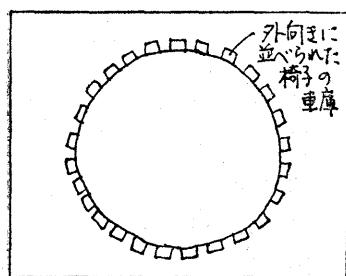
有物としての椅子へと、子ども達自らが意味の変換を行なっているといえる。しかし、部屋のまわりを囲むように並べられたその椅子は、家の真中に運び込まれたテーブルと対照させてみていくと、家具そのものとしてよりもむしろ家の“壁”として並べられ、リスという外敵から身を守るために新たな機能が付与されたと捉えることができる。実際に子ども達は、リスに追われて家に逃げ込んだときに、手で鍵をかけるまねをしたりして椅子のかけに身をひそめると、そのことに夢中になつて家の中の居場所は問題にならない、というふうであった。

#### 記録四 一九八三・一〇・二七

①首から絵カードを下げる子ども達は、「果物をのせたバス」になりきってバスごっこすることになる。「バスが発車します」の合図でいろんな速さのバスが走り始める。途中で

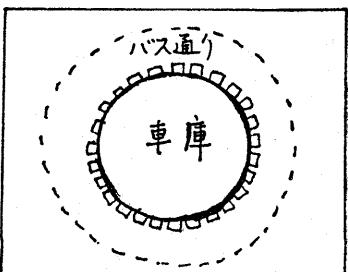
「バナナ」と言うと、バナナの絵カードを下げる子ども、すなわちバナナをのせたバスだけが車庫に見立てられた椅子に座るというルールである（図6参照）。

②車庫の設定場所をバス通りの近くにするか（図7参照）、あるいは遠くにするか（図8参照）によつて、子どもの椅子の獲得のしかたに違いがみられた。近い場合にはどの椅子に座るかにこだわり躊躇していたが、遠い場合にはスムーズに座ることができた。

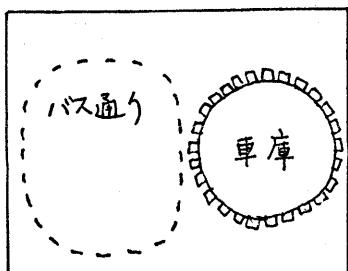


▲図6

織り込まれ、「果物をのせたバス」として始められた。この遊びでは、椅子は車庫に見立てられているが、ひとりずつ確保するよう定めら



▲図7



▲図8

れていたために、椅子へのこだわりが再びみられたようである。

遊び方を細かくみていくと、車庫が近くにある場合と遠くにある場合とではその違いが歴然としていることに気づかされる。なかでも特に前者の場合には、一旦自分のものとして確保した後に手放すことになった椅子を目の前にして車庫のまわりをまわるので、子ども達は再びその椅子を獲得することを意識せざるを得なかつたとい

て共有物としての車庫づくりをしたために、個人の椅子とは異なる意味づけがすでに行なわれていた。その上、バス通りと車庫とが離れていたために、遊びの中で車庫を探すことばかりに意識が向けられず、バスになって走り回る快さを十分に味わうことができたと考えられる。

この日の記録からは、場の設定のしかたによって子どもの動きに差違が生ずることを読みとることができる。

#### 記録五 一九八三・一一・八

「ピアノのリズムに合わせて散歩に出かけよう。途中でオオカミが出てきたら、食べられないようにお家に逃げよう」と子ども達にルールを説明した後に、皆が座っている椅子をそのまま家に見立てる約束をする。そして遊びを始める。子ども達は、オオカミTが出てきたところで素早く空いている椅子を探し出し、全員がスマーズに座ることができた。

この記録では、まず、果物の絵カードが用いられて

ないところに特徴がある。しかも、椅子を並べかえることをしないでそのままの状態で椅子を家に見立てることに成功している。

この遊びは、たんぱ組の子ども達が以前から好んで遊んでいた「オオカミごっこ」のルールにのっとっていたので、子ども達は果物ではなく子ヤギになつて逃げ回つていたようである。親しみのあるオオカミと子ヤギの

お話の一部分を聞いてイメージをふくらませ、直ちに物語の世界に入り込んだ子ども達にとって、もはや場の設定を改めて行なう必要はなかつたといえよう。子ども達は、ファンタジーの世界に身を浸すことによつて遊びの共通のイメージに支えられ、自分の椅子という所有物へのこだわりから自分自身を解放することができたと考えられる。

### ＜まとめ＞

ができるようになった。初めのうちは自分の席から離れることに抵抗を示した子ども達であったが、遊びを通して個人の所有物へのこだわりを解消し、共有物としての遊具の機能を受け入れることができるようにになったのである。

このプロセスにみられる子ども達の変化を、椅子とのかかわりという点から整理してみよう。

まず、子ども達にとって、椅子は、自分の身体を安心して委ねることのできる、拠り所としての“もの”である。また一方で、友達とのつながりによって場所が選ばれていることから、クラスというひとつ社会の中での自分の位置を明らかにする“もの”もある。

このような個人の所有物としての椅子が、遊びの中で共有物として意味づけられたとき、子ども達は、現実界の所有物としての“もの”へのこだわりから離れて、容易に非現実の世界へ入り込むことができた。こうして、集団のごっこ遊びが成立すると、共有物としての椅子は、個人と個人の間の共通の媒介物として位置づけら

れ、個々人と等しくかかわりをもつものとなるのである。

このような意味上の変換によって、子ども達は、"もの"そのものだけでなく、自己へのこだわりからも解放され、遊びのイメージを純粹に生きることができたといえる。

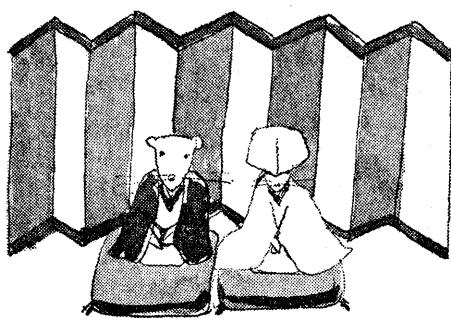
この遊びにおける非現実性は、子どもの置かれている現実をのりこえる力を備えており、そのような本来的な遊びを通してのみ、子ども達は、新たなる自己を創造して自己を拡張していくといえよう。非現実の世界をくぐりぬけることは、単なる現実逃避ではなく、現実界における困難に対して新たな存在となつて立ち向かうために必要とされる、積極的な意味での"一時的逃避"を捉えることができるよう。

以上、本研究を通して明らかになったことは、椅子が子ども達にとって自己の確立のための条件となっていたということであるが、今後の課題としては、子どもの自己の発達の上で遊具としての"もの"がどのような機能

を果たすかという点について、広い視野から検証していくことが残されていると思う。

(西南女学院短期大学)

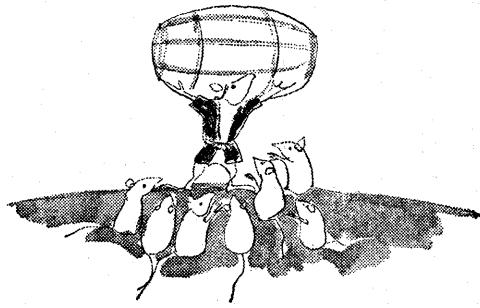
〈付記〉本研究を遂行するにあたりご協力くださいました三代恵子先生(前短大附属シオン山幼稚園教諭)に心より感謝いたします。



## 近代短歌に現われた子ども（二十一）

(42) 出征将兵等の歌 くつづき)

### ②『大東亜戦争歌集』(将兵篇)



大塚 雅彦

『大東亜戦争歌集』と名づけたものにも二種がある。一つは「日本文学報国会」の事業の一環として同会短歌部の編さんしたもので、昭和十八年九月に協栄出版社から刊行されている。昭和十四年から十七年十一月までの戦没将兵・現地の将兵・傷病将兵・看護婦・軍属等の二〇六〇名の作三三九八首を収めている。『和歌文学大辞典』の木俣修の説明によると「数多くの検閲をくぐった歌であるから、最も誠実に人間的・精神をもつて歌つたものなどは滅びてしまったであろうが、戦争の現実の惨を伝え、微かな戦争への抵抗を試みたようなものがないでもない」

という。もう一つは柳田新太郎編に成り、『愛國篇』『將

兵篇』の二冊として共に昭和十八年一月に天理時報社から刊行されたものである。前者は昭和十六年の開戦の日

から十七年七月に至る期間の雑誌新聞に発表された作品を博搜して八二一名の作者の二五八八首を収めたものだ

が、「空虚な觀念的な戦争讃歌と、緒戦における戦捷祝歌」とその内容をなしているもので、短歌がようやく人間的な精神を喪失して、ひといのくの〈愛国調〉に塗られていこうとする姿を如実に示している」と木俣修が述べ

ている通りであり、こんにち読むに堪えないものが多

い。これに対し『將兵篇』の方は、『愛國篇』と同じ期

間、同じ方法によって五二四名の作品二五六二首を収め

ているが、文字通り各方面に派遣された将兵や軍属、報

道班員、戦争に直面した現地邦人等を作者としているだけに、戦争の悲惨さを歌い、人間性を強く刻印している

ものが少なくない。いま『將兵篇』の方から、子どもが出てくる歌を若干抄出してみよう。

①仏壇に剪りし頭髪藏ひをれば何ぞと吾子の怪しみて

訊く

(善陸病 玉尾延忠)

②父われとひとつ臥處に寝ることをよろこびそめし頃  
を召されぬ (牡丹江 利根 洋)

③死ぬる身と思へば泣く日あらせすと妻に子どもを生  
ましめにけり (横須賀 中村精希)

④ふたたびのめぐる忌日に愛し子の戒名を知らず今日  
もわれ征く (北支 生田景応)

⑤ため置きし妻の音信が三年半の吾子が成育日記とな  
りぬ (中支 城戸義人)

⑥一番の鶏は師走の二十日より卵を産むよと吾子は言  
ひ来ぬ (中支・北満 松岡茂夫)

⑦小さき手をわが陰膳にあはすとぞ読みかけしまま涙  
たりをり (中支・北満 松岡茂夫)

⑧蛙鳴く道にしおもふるさとの夕べをいかに子があ  
ることぞ (満州 寺内貞一)

⑨かしこまり写れる吾子よ戦ひの父想へるやその小さ  
き胸に (中野正巳)

⑩右左寄り来る子らはよらしめて頭たたかす子の父我

は 帰還 松本千代二)

⑪ 昨日陥らし敵トーチカに銃を握り重なり死せる少年

兵あはれ

(広瀬俊勝)

⑫ 童は母失せければこの國の古りし習と白き沓はく

(北支 有川美亀男)

⑯ 知人の娘に似たる少姑にその名をつけて呼び慣らし

居り

⑭ 日本の兵隊さん今日はと鮮かに安南コンキッ小童我に言ひ来

(仏印 森岡三郎)

①②は出征の折の「父と子」である。①はフモールす  
ら漂っているが、内容は深刻なのだ。そのちぐはぐな感  
じが却って読者の心にほろにがい味わいを与える。②  
も、しみじみとした情感が、実感として伝わってくる。

③はユニークな作品だ。出征兵の中には、妻を未亡人に  
したくないからと婚約者や恋人との結婚をむしろ諦めて  
前線に出て行った者もあつたことが、手記を読むとわか  
るが、③の作者はむしろ「自分は死ぬ身だから、あとに  
残る妻を泣かせないよう子どもを生ませた」という逆

のような発想なのか？ こういう考え方も当時あつたの

であろうか。④の作者は出征中に愛児を喪ったのである  
う。⑤⑥⑦は妻や子の便りであるが、⑥が子どもの手紙

の文句をそのまま取り入れたような面白味がある。⑧⑨

は戦地で愛児を偲んでいる。⑩は帰還した父をめぐる子

ども達の姿が出てをり、作者は白秋門下の歌人。⑪は所

属軍の名称や駐屯地の記入がないが、中国戦線であろ

う。渡辺直己作品に似ているが、結句を「あはれ」とい

う一般的、類型的感懷で結んでしまったのは、悲劇的な

内容のリアリティを薄めていて惜しい。⑫⑬は中国の子

ども達、⑭は珍らしく安南の幼童が登場している。⑫の

作者は歌誌「眞人」の同人で国文学者である。

#### ⑤『昭和万葉集』巻六

「詞華集」としては『昭和万葉集』を逸するわけにはいか

ない。これは講談社が創業七十年記念に、全二十巻、別  
巻一を昭和五十四年から刊行したもので、野心的な試み  
であった。第一回配本は巻六(昭54・2刊)であり、この  
巻は「太平洋戦争の記録」と銘うつて、戦中歌として、

つまり昭和十六年の開戦の日から二十年の敗戦直後までの戦地詠・銃後詠等を収めている。個人別でなく、<sup>アーティスト</sup>主題別になつてゐるから、戦争時の種々相が展望できる。ただその集録・編集方針には批判がないわけではなく、これをもつて太平洋戦争時代の短歌を全く網羅しているなどとは言えない。例えば歌壇綜合誌「短歌現代」昭和54年8月号には「昭和万葉集巻六を考える」という特集があるが、それに載つてゐる諸家の批評を見ても、応募しなかつた人の作品が入つていないし、当然入るべき者の歌が落ちてゐるとか、戦時中は戦争讃美・謳歌のうたや戦意昂揚の歌などもむしろ多かつたのに、それらを省略して

いるのは客観的に見て公正といえるだらうかとか、沖縄戦の歌や原爆関係の歌が全くないのは何故だらうとか、

そもそも作品の文学的な質・レベルを揃えた詞華集的なものにしようとしたのか、それともクロニクル的な意味を重視する方向に重点があるのかはつきりせず、中途半端的であるとか、かなり厳しい批判が提出されている。

それに、もとより短歌は文学作品でありルボルタージュ

や記録そのものとは違うのであるから、近松のいわゆる「虚実皮膜の間」に成るものであり、事実そのものと考えたら、むしろ判断を誤るかもしれない。併し乍ら、短歌は他の文芸に較べるとかなり事実に即してうたう面が強く、従つて戦場や戦争下の生活の実態を臨場感をもつてうたつてゐるので、作品から当時の国民の生活感情や庶民の意識をうかがうことが出来るのである。

①真綿帽子かむりてねむり深き子に発ち征くわれの手をふれてみつ  
(二村伝次)

②隊列に何処までついて行くならむ幼な児背負ひ小走る妻は  
(武生文夫)

③幼らの勢ひ旗ふる道ゆけり面はゆくして送らるるわ  
れや  
(吉野昌夫)

④初年兵われら子を持つ父にして寄ればおのづと子等を疇す  
(桜井慶雄)

⑤わが子とかく語らふはかつてなし兵舎の長き卓に残りて  
(杉浦民一)

⑥空を暗み移らふ蝗のむれ見れば子への便りにまづ書

きにけり

(村井憲太郎)

(福田栄一)

⑦黄に濁る空はるかなれ柳子陰に生徒の便り読みかへしをり

(安良岡康作)

⑧薯粥の熱き食しつつクアラランプール衝きし少年戦車兵を思ふ

(巽与志雄)

⑨わが前に煙草をねだる浮浪兒の澄みてかなしき日本語言ふ

(川口常孝)

⑩代用食ひがてぬ子を論せどもわれもまづしと思ひつつ食す

(鑑京造)

⑪たまさかに配給の肉は子らに分け妻と煮こみの野菜のみ食ふ

(佐沢波弦)

⑫魚油くさき石鹼泡立て湯浴みする幼き姉と妹のこゑ

(嶋正子)

⑬門前に母待つ子等のざわめきぬ終業近き軍需工場は

(水谷利)

⑭食乏しく勤労奉仕に疲れ果てて帰り来し娘は病みて死にゆく

(金子不泣)

⑮秩序なき工場にて子は日毎工員などと争ふらしき

⑯土いぢり余念なき子の胸の上にうすよごれたる身許りゆく

(富山繁子)

⑯徹夜作業の続く日ごろに疲れたる生徒は空襲に避難すらせす

(井川美弥子)

⑰たちまちに稻刈り終へし女学生等互に身装整へはじむ

(藤原多計志)

⑱銃持ちて丘に来れる女学生の一群ありて射撃始めぬけり

(杉本栄一)

⑲命捨てて国に報ゆる者誰ぞと言ひ終へざるに皆立てり児等は

(佐久原直樹)

⑳聴きわけて疎開ときめし末の子の寝姿今宵幼なかりけり

(稻垣以登)

㉑盛り分けし椀いつ杯の芋がゆを疎開の子らは拌みて食む

(浜中ふじの)

㉒五年生山田茂と言ひし児は母の写真に声かけて寝ぬ

(野沢学人)

㉓待避壕ひそかにうたふ子守唄頭巾まぶかく子はねむりゆく

(金子不泣)

認識票

(大岩徳二)

㉕機銃掃射の炸裂音に小さき掌は吾が乳房握り顔を埋むる

㉖土壤に敵機を避けてゐ向へば我が膝の子は父へと移る

(大久保礼子)

㉗空襲の火の海逃れ夜の明けを路上に深く児と眠りたり

(亀井斐子)

㉘人群の中に吾れと子と呼び合ひて声あれば又走り出だせり  
(杉浦よし子)  
㉙子を背負ひ火中来る人用水に駈け寄り水を背の子にあびす  
(都筑省吾)  
㉚逃げおくれ炎の中臥せる父子子の狂ひ出で父を罵る  
(同)

の帽子をかぶり、ねむつてゐる嬰児に別れての出征、②は壮行の行進隊列の中に居る夫を追つて、幼児を負うたままちょこちょこ必死に走る妻——緊迫した場面である。③は学徒出陣の歌だ。学徒出陣というのは、従来大学・高専在学生は徵兵延期を認められていたのを、昭和十八年十二月一日に延期廃止をして入隊させることとなつたもので、この年の入隊を「学徒出陣」と称した(私

のよう)に昭和十六年大学入学者は「半年繰上卒業」で辛うじて卒業出来たが、翌十七年入学組以降の者はこれに該当した)。その年十月廿一日明治神宮外苑競技場での雨中の分列行進が、この出陣学徒壮行大会である。安田武の推定では、この折の出陣学徒総数は全国で十二、三万人くらいという(安田『学徒出陣』昭42・10)。これを扱つたものに安田の本の他に、東大十八史会編『学徒出陣の記録』(昭43・8)、野原一夫『回想学徒出陣』(昭56・10)等がある。③の作者(現「形成」編集責任者)は當時、東大農学部在学中のまま学徒出陣したもので、この歌は、子ども達が元気よく旗を振つて送つてくれるのを見ぬ  
(矢代東村)  
①②③は出征の歌である。①は生まれたばかりで真綿

に、学徒らしい羞恥心かられてれているのであろう。④⑤は軍隊生活の歌だ。④は初年兵（入ったばかりの兵で、最下級の二等兵である）でありながら年輩者であるから子持ちの兵隊ばかりであることがわかる。私が二度目に在隊した朝鮮・平壤第五十一部隊なども老兵の召集兵が多く、故国の子ども達のことを思い出してはメソメソしていたのを、独身者の私は同情していたのを思い出す。⑤は面会室での子どもとの語らいだろう。⑥は中国戦線で、中国の蝗の大群のことはペール・バッカの名作『大地』に出てくる場面がある。⑦は教師の歌で、この作者は国文学者である。⑧はマレー戦線で、「少年戦車兵」とは少年航空兵・通信兵などと同じく、昭和十四年から十六才以上の志願者を兵に採用したのだ。無惨なことであった。⑨は中国戦線で、この浮浪児は中国の児だ。この作者も国文学者である。⑩⑪⑫は食料や物資の悪化で、その逼迫が子ども達にまで及んだことがわかる。⑬から⑯まではいわゆる勤労奉仕・勤労動員を扱っている。⑯では母親もまた工場で働き、他の歌では動員された子ど

も達のみじめさが描出されているが、⑰は女児の本能のようなものを描き、微笑ましい。⑲は女生徒も軍事教練をさせられたことを示す。⑲は軍国下の教師と教室の教え子たちの姿だ。⑳から㉑までは学童疎開させられた子ども達の生態である。㉒から㉓までは待避壕生活や空襲下の防空壕の中での緊迫した状態をうたう。㉔の「頭巾」というのは防空頭巾である。㉕の「身許認識票」というのは、戦争中に身もと不明にならないように住所・氏名・年令・血液型などを書いて胸に貼られた布である。㉖の作者は評論家亀井勝一郎の夫人である。㉗から㉙までは東京大空襲等の歌である。㉚㉛の作者も国文学者、㉜の作者は革新系の弁護士で、「人民短歌」系の歌人であり、㉝の作者福田がジャーナリストで歌誌「古今」を主宰した人であるのと共に、著名歌人であった。私はこの巻六では、ここに例示したような空襲をうたつた歌が、阿鼻叫喚のぎりぎりの世界を鋭くとらえて最も充実した作品群だと思う。

## （）その他

米田利昭宇都宮大教授は、戦争と近代短歌との関係を最も深く追究している国文学者であるが、その近著『兵士の歌』(昭58・8)は歌誌「アララギ」の戦場詠投稿者から將兵六人を選んで、彼等の歌を解説し、生涯を素描している。その中に子どもを詠じた作品もある。

群衆に驚けるらし声たてず妻に抱かれて手をあぐる子は

(武田嘉雄)

召され來し北支那の町に小孩子らと爆竹あげて年祝ぐ吾は

(村石波之助)

引き揚ぐる高砂丸の子供等よ日の丸打ち振り打ち振り

万歳の声

夜の汽車にいたく汗垂り嬰兒を抱く母見れば故郷思はず

(小島弥太郎)

このうち、小島は海軍予備学生の航空少尉として、昭和十九年六月テニアンの空中戦で戦死している。

大谷晃一帝塚山学院大教授の近著『歌こそわが墓標』(昭59・7)は、副題に「昭和無名歌人伝」とある如く、「民衆の中の、名もない歌詠み」の人々にインタビュー

などの取材をして彼等の半生を描いているが、

玉碎の命下りし夜の北の空四人の吾子の姿映りぬ

(平出孝行)

の佳作や、敗戦前後の満州における子ども連れの引揚逃亡の苦難をうたった中西さんの一連等がある。

暮れ方は乳欲りおびえ泣く子らの世界となりて灯りなき汽車

(中西恭子)

追はれつわれ等が部屋に逃げこみ来し母もその子も既に髪なし

母われの肌の温みも甲斐なきか冷えゆく吾子をただ抱きに抱く

吾子を焼きし小山の見ゆる道恋ひて帰國ま近きけふ町に出る

まことに世には短歌のような渺たる文芸に人生を托して生きるつましい人々も居る。本書中の一人林満子さんが述べているように「わたくしの歌が一首でもそこに残れば、生きて来たしになる、わが墓標になる」ということであろうか。

(お茶の水女子大学)

月刊雑誌の進行は、お先走りもはなは ということを覚えたようになります。

だしく、うつかりすると、自分がどの季節を生きているのかすらわからなくなってしまいます。この一月号の小さな記事を十一月に書いているのですが、あと一月、十二月まで、季節の狂いの時間を過しましたら、自然の移ろいの時間に戻る

うと思います。足かけ八年になりましたよ

うか、水田順子さんからバトンを受けて編集に携つてまいりましたが、そのバトンを小澤聰子さんにお渡しいたします。編集の仕事を始めたばかりの時、原稿の依頼状の書き方もわからず、模範の手紙文を書いてほしいと水田さんにお願いしました。すると水田さんは、「私も、はじめに、同じことを赤間さんに言つたわ」と、大笑いになりました。要は、こちらの熱意が伝われば、原稿はいただけ

るということが、すぐにわかつてしましました。私は、編集にかかることで、人に長い間にわたり、お力添えをいただきま

るものをお預むということと、人があやまるしてありがとうございました。(皆川)

幼児の教育 第八十四巻 第一號  
一月号 ©

定価三〇〇円

昭和六十年十二月二十五日 印刷

昭和六十年一月一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼  
発行人 本田和子

東京都文京区大塚二ノ一ノ一  
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

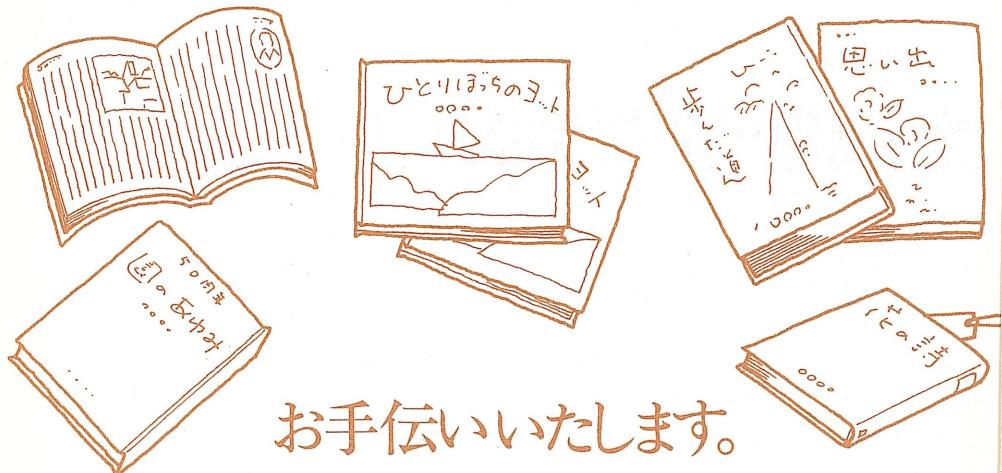
発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

●本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

\*万一製造不良の点がございましたら、おとりかえいたします。

# 記念の本づくりを 自費出版版なさいませんか。



# お手伝いいたします。

- 内容、装幀、部数など思いどおりになる自費出版。手間のかかる編集作業は、キング一ブックや優良保育図書、雑誌などを手がけてきたプロの編集者がすべてお手伝いいたします。

- お気軽にご相談ください。
  - 完成したご本については、小社の宣伝ルートを通じて全国にご紹介いたします。

1. 本の内容は…… 自叙伝、童話集、絵本、園の記念誌、研究集録、隨想集、作品集など、ご随意に。
  2. 製作部数は…… 1,000部以上がお得意ですが少部数でもお受け致します。
  3. 製作期間は…… 原稿頂戴から完成まで、約3か月見てください。
  4. 本の大きさや体裁は…… 大きさはB6判、B5判、A5判など。製本

は、上製本から並製本カバーフルまで各種あります。好みのままに。また表紙などはご希望のセンスを尊重してご相談に応じます。

5. 本文は……原稿用紙に書かれたものでも、テープに吹きこまれたものでも、結構です。綺麗でわかりやすい組み方にいたします。
  6. 絵や写真は……もちろん結構です。カラーのご相談にも応じます。

子どもの心と明日を考える

・キンダーブックの

**フレーベル館** 記念の本づくり係 〒101 東京都千代田区神田小川町3-1  
TEL 03-292-7788

(ご連絡はお近くの小社代理店・事業所にどうぞ。)

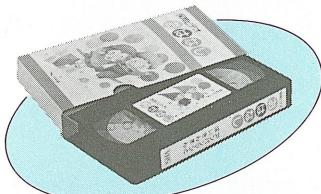
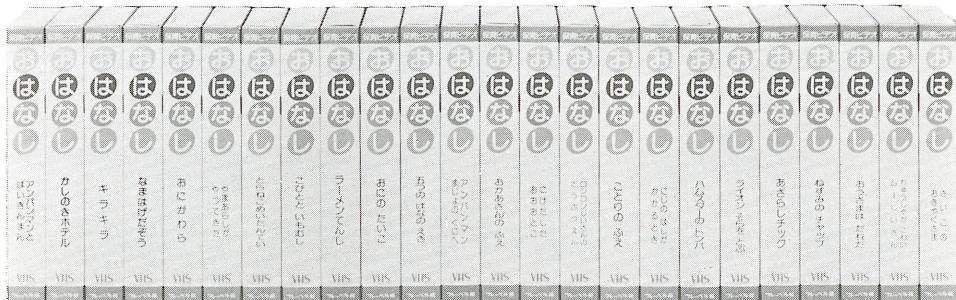
大好評の保育ビデオ、全セット遂に完成。

# 卒園記念に最適です。

保育ビデオ

勇気、友情、冒険そして……

# おはなし シリーズ 全24巻堂々完結！



今や、子どもたちの人気の的。  
夢ひろがるアニメーションです。

各集2巻1セット ¥25,000 12集24巻セット ¥300,000

| 集   | タイトル                  | 集    | タイトル                       |
|-----|-----------------------|------|----------------------------|
| 第1集 | アンパンマンとぱいきんまん かしのきホテル | 第7集  | おかあさんのふえ にげだしたおおおとこ        |
| 第2集 | キラキラ なまほげだぞう          | 第8集  | ロンロンじいさんのどうぶつえん ことりのふえ     |
| 第3集 | おにがわら やまあらしがやってきた     | 第9集  | にじのはしがかかるとき ハムスターのドンパ      |
| 第4集 | とらねこめいたんてい こびとといもむし   | 第10集 | ライオンそらをとぶ あざらしちック          |
| 第5集 | ラーメンてんし おにのたいこ        | 第11集 | ねずみのチャップ おうさまはだれだ          |
| 第6集 | 五つのはなのえき アンパンマンまよのくにへ | 第12集 | ちゅうしゃのこわいムーじいさん さいごのおきやくさま |



VTRは美しい映像とうるおいのある環境を作ります。

ビクタービデオカセット  
**BR-7110** ¥139,800



**Victor**

やっぱり、ビクター。鮮やか、簡単、安心、3拍子そろった有能ビデオです。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える  
キンダーブックの  
**フレーベル館**